
調査年報 20

平成 19 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



P1196遺物出土状況



P1275遺物出土状況



ブロックNo.6 ループ状の編みがみられる面、溝・穴が認められる。



ブロックNo.6 タテ糸間隔が密な面。



ブロックNo.6 繊維の断片。縦り編みが認められる。



ブロックNo.6 ループ状の編みがみられる面、溝・穴が認められる。ブロックNo.6 タテ糸間隔が密な面、溝・穴が認められる。
縦り編組織を基本とした「模様編み布」





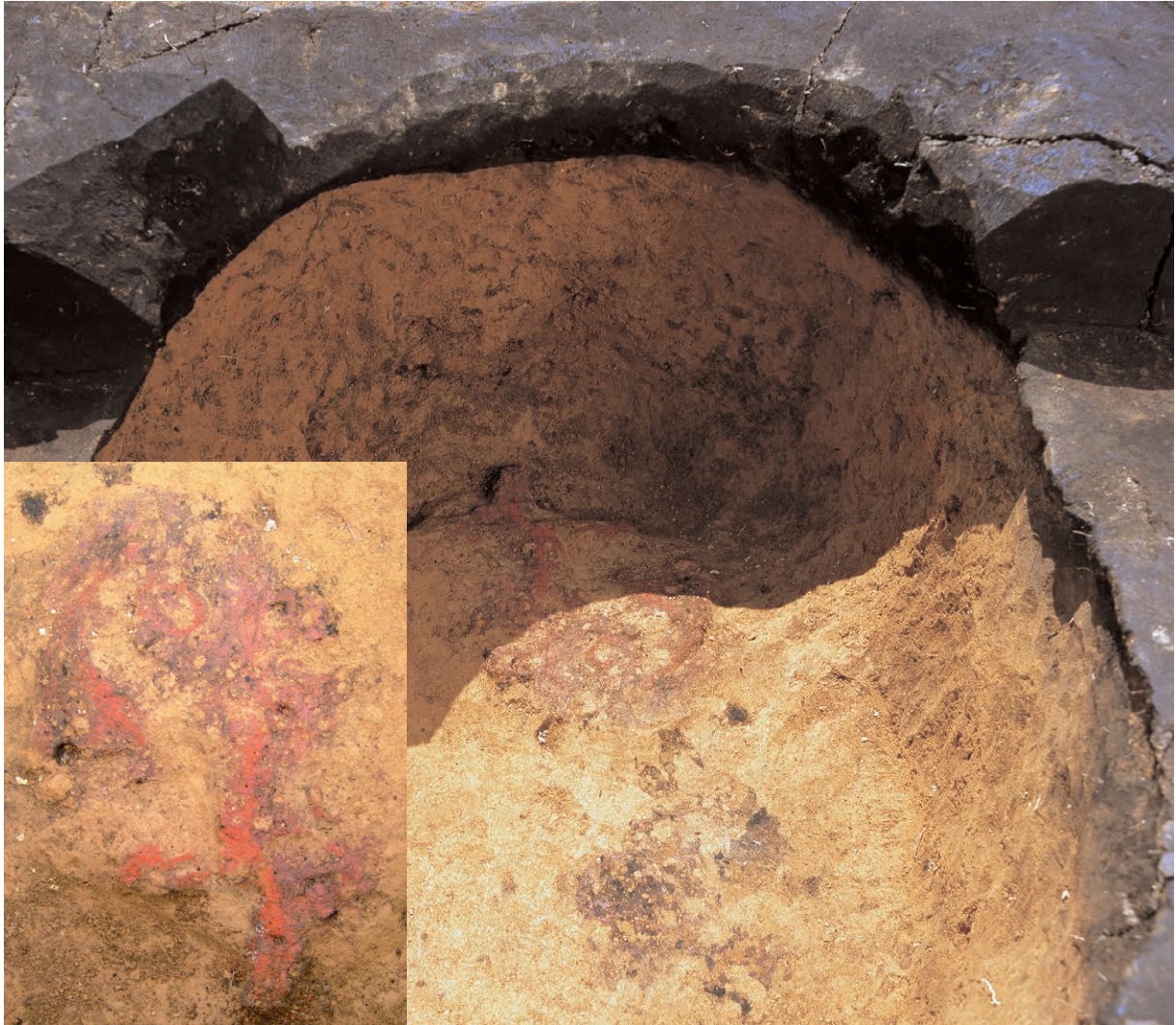
ブロックNo.4（写真上）No.5（写真下）縦り編でタテ糸間隔の密なもの、広いものなど様々な編み方が確認できる。
縦り編組織を基本とした「模様編み布」



UP-56埋設土器検出状況



UP-56埋設土器内の石器出土状況



P-24漆製品出土状況



P-25漆製品出土状況



住居跡(CH-25)全景

目 次

平成19年度の調査

1	調査の概要	1
2	調査遺跡	4
	千歳市オルイカ 2 遺跡	4
	千歳市キウス 5 遺跡	7
	千歳市祝梅川小野遺跡	12
	千歳市梅川 4 遺跡	20
	江別市対雁 2 遺跡	26
	北斗市館野 2 遺跡	28
	北斗市矢不來 6 遺跡	32
	北斗市矢不來 9 遺跡	33
	北斗市矢不來11遺跡	36
	北斗市館野遺跡	37
	下川町サンル 4 線遺跡	38
	白老町虎杖浜 2 遺跡	40
	遠軽町白滝遺跡群	44
	恵庭市西島松 2 遺跡	56
	むかわ町穂別 D 遺跡	60
	鶴居村下幌呂 1 遺跡	64
3	現地研修会の記録	68
4	協力活動及び研修	69
5	平成19年度刊行予定報告書	72
6	組織・機構	73
7	職員	74

北海道史略年表

本州の時代区分	年代（西暦）	北海道の時代区分	平成19年度調査遺跡の主な時期
明治～平成	A. D. 1900	(近代、現代)	
江戸時代	A. D. 1200	近世 アイヌ文化期	梅川 4 B、梅川 4 C 穂別 D 祝梅川小野 西島松 2 キウス 5
室町時代			
鎌倉時代		擦文文化期	
平安時代			
奈良時代	A. D. 800		穂別 D 西島松 2 祝梅川小野
古墳時代	A. D. 300	続縄文時代	梅川 4 B 対雁 2
弥生時代			
縄 文 時 代	晩期	晩期	梅川 4 A、祝梅川小野、西島松 2 オルイカ 2
	後期	後期	下幌呂 1、西島松 2、梅川 4 A 祝梅川小野、穂別 D、館野 2
	中期	中期	矢不來 9、梅川 4 A、梅川 4 C サンル 4 線、館野 2、キウス 5
	前期	前期	祝梅川小野 西島松 2、虎杖浜 2
	早期	早期	穂別 D、虎杖浜 2 下幌呂 1
	草創期	草創期	旧白滝 5 旧白滝 5、ホロカ沢 I 旧白滝 5、キウス 5、館野 2 旧白滝 5、白滝 15
	旧石器時代	B. C. 12000	旧石器時代
B. C. 20000			
	B. C. 30000		

平成19年度の調査

1 調査の概要

今年度は道内10市町村に所在する19遺跡で発掘調査を実施した。このうち10遺跡は先年からの継続調査である。継続で整理作業を行ったのは4遺跡である。

発掘調査を工事原因別に見ると、国土交通省北海道開発局の各開発建設部が実施する工事に伴う調査が16遺跡、北海道（土木現業所）が行う工事に伴うものが3遺跡であり、いずれもダムを含む河川工事及び道路工事に伴うものである。

以下、調査の成果を時代、時期順に略述する。縄文時代の遺跡では複数の時期の遺物が出土することが多いが、ここでは顕著なものを重点的に述べる。なお、遺構などの（ ）数字は員数である。

旧石器時代 白滝遺跡群では5か所の遺跡を調査した。すべての遺跡で多量の遺物が出土し、それらは遺物集中範囲ごとに平面的に分離することができ、いくつかの時期の重複を確認することができる。石器群の中には、石刃技法のもの、舟底形石器を特色とするもの、尖頭器を特色とするもの、有舌尖頭器を特色とするもの、側縁鋸歯状の小型尖頭器を特色とするものなどがある。

キウス5遺跡では、オショロッコ型の細石刃核を含む細石刃石器群が検出されている。祝梅川小野遺跡では細石刃が5点認められた。館野2遺跡では頁岩を素材とする少数の細石刃が出土している。サンル4線遺跡では、珪質頁岩とみられる石刃素材のスクレイパー(1)が出土している。

縄文時代 早期 下幌呂1遺跡では浦幌式土器に伴って石刃鎌石器群が出土している。ここでは中茶路式土器の時期の竪穴住居跡(1)、土坑墓、土坑も検出されている。虎杖浜2遺跡ではアルトリ式土器、中茶路式土器が出土している。穂別D遺跡では、東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式などの土器が出土している。

前期 虎杖浜2遺跡では、30mを上回る広がり最大厚40cmほどの盛土が検出された。この盛土遺構直下の土坑墓(2)には、いずれにも装飾品らしき漆製品が残片的に認められる。砂が密に堆積しているところ(2)、粘土の集積(2)もある。土器は静内中野式、円筒土器下層a式が多い。西島松2遺跡では植苗式土器の時期の竪穴住居跡(2)が検出されている。祝梅川小野遺跡では、植苗式土器の時期の竪穴住居跡(5)、土坑が検出されている。住居跡周辺の土坑(5)からは掌大の粘土板（サツマアゲ状土製品）が10点ほど出土している。

中期 サンル4線遺跡では押型文土器が検出され、珪化岩の礫、石核、剥片、碎片が多量に出土している。石核、剥片の接合状況は、ここが剥片剥離、石器製作の場だったことを示している。館野2遺跡のB地区とC地区では、円筒土器上層b式土器、サイベ沢Ⅶ式土器、見晴町式土器、大安在B式土器などの時期の竪穴住居跡、土坑、焼土、集石などが密集して検出されている。これらの土坑には、墓とみなされるもの、フラスコ状のもの、埋設土器を伴うものがある。キウス5遺跡では、天神山式、柏木川式などの土器型式の時期の住居跡、土坑、焼土などが密集して検出されている。焼土の多くは被熱が著しく、列状に並んでいる。さらにここでは、平成8年の発掘で「柵列」の可能性があると報告した「杭穴」に類似した小土坑が、列状にみられる。矢不來9遺跡では竪穴住居跡(1)、土坑、焼土が検出されている。この住居跡は、6か所の柱穴が明瞭である。

梅川4遺跡A地区では、柏木川式土器の時期の竪穴住居跡(1)が検出されている。梅川4遺跡C地区では、北筒式土器が出土している。下幌呂1遺跡では30mを上回る広がり盛土が確認されているが、詳細は、次年度の調査を待つことになる。

後期 祝梅川小野遺跡では、土器(タプコブ式)囲炉のある竪穴住居跡(2)、中葉の時期の竪穴住居跡(2)が検出され、ウサクマイC式土器、鯰澗式土器、堂林式土器などが多く出土している。加曾利B式の特徴が明瞭な注口土器の完形品も出土している。穂別D遺跡では石囲炉(2)、土器囲炉(2)が検出されている。館野2遺跡B地区には、涌元式土器が集中的に出土する区域がある。下幌呂1遺跡の竪穴住居跡は、北筒Ⅲ式土器の時期(1)、鯰澗式土器の時期(2)がある。このうち鯰澗式の住居跡のひとつは、出入り口部分が明瞭である。西島松2遺跡では中葉の時期の竪穴住居跡(2)が検出されており、2軒とも出入り口部分が確認できた。梅川4遺跡A地区では、中央に地床炉のある4本柱の住居跡(2)が検出されている。

晩期 梅川4遺跡A地区では、後葉の時期の竪穴住居跡(1)、土坑・土坑墓(437)、土器集中(2)、石器類の集中(6)が検出されている。祝梅川小野遺跡では、竪穴住居跡(2)、土坑(58)が検出されている。土坑のひとつには、壺形土器が倒立して埋設されていた。この土器内部はほぼ空洞で、口縁部近くに黒曜石の大形剥片(6)が認められる。西島松2遺跡では、後葉の時期の土坑墓・土坑、焼土などを多数検出している。これらの遺構は、昨年度の調査区域から続いており、なかには遺体が痕跡的に残存しているものもある。この時期の土器、石器も多量に出土している。オリカ2遺跡ではタンネトウL式土器が出土している。

続縄文時代 対雁2遺跡では、前葉の時期の土坑(8)、焼土(29)が検出されている。梅川4跡B地区では、前葉の時期の土器が出土している。

平成19年度の発掘調査など

事業委託者	原因工事	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	区分、備考
札幌開発建設部	一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事	キウス5	千歳市	6,100	平成15、16、18年
		オリカ2	千歳市	4,200	平成14、17年
		梅川4	千歳市	8,655	平成18年
		祝梅川小野	千歳市	7,630	新規
石狩川開発建設部	石狩川改修工事の内対雁築堤工事	対雁2	江別市	150	平成11年から継続
函館開発建設部	函館江差自動車道建設工事	館野2	北斗市	6,707	新規
		矢不來6	北斗市	587	平成17年
		矢不來9	北斗市	2,030	新規
		矢不來11	北斗市	246	平成17年
		館野	北斗市	整理作業	平成16年調査
旭川開発建設部	天塩川サンルダム建設工事	サンル4線	下川町	4,200	新規
室蘭開発建設部	登別拡幅道路改良工事	虎杖浜2	白老町	1,590	平成18年
釧路開発建設部	釧路外環状道路改良工事	天寧1	釧路町	整理作業	平成17、18年調査
網走開発建設部	一般国道450号白滝丸瀬布道路工事	ホロカ沢I	遠軽町	4,331	新規
		旧白滝1	遠軽町	2,800	新規
		旧白滝5	遠軽町	2,260	平成15、18年
		旧白滝15	遠軽町	4,670	新規
		旧白滝16	遠軽町	1,821	新規
		旧白滝5ほか	遠軽町	整理作業	平成15年調査
石狩支庁 (札幌土木現業所)	柏木川改修工事	西島松2	恵庭市	8,779	平成17、18年
		西島松2ほか	恵庭市	整理作業	平成18年調査
胆振支庁 (室蘭土木現業所)	道道北進平取線交付金B(交安)工事	穂別D	むかわ町	4,154	新規
釧路支庁 (釧路土木現業所)	道道釧路弟子屈線交安1種(統合)工事	下幌呂1	鶴居村	610	新規
合		計		71,520	

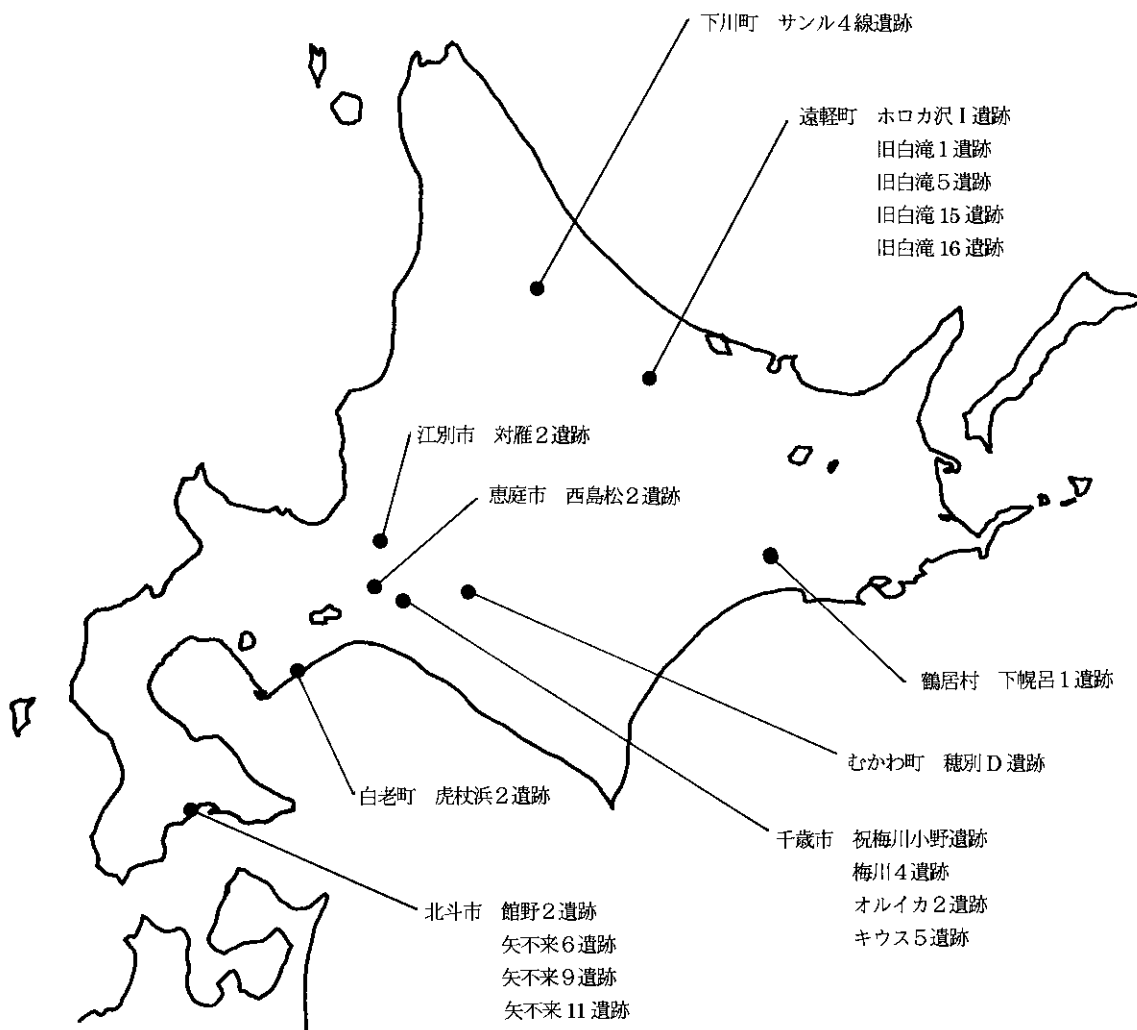
擦文文化期 穂別D遺跡の竪穴住居跡(1)は、貼り床で、中央に炉、東側にカマドがある。この床面からは甕、杯、鉄製品が出土している。キウス5跡では竪穴住居跡(2)、土坑(1)、粘土集中(1)が検出されている。西島松2遺跡の竪穴住居跡(11)は、一辺が5m規模のもの、一辺が2m規模の2種類あり、すべてカマドがあり、煙道は東あるいは南側の壁にある。9軒は柱穴が竪穴の外にあるカリンバ型住居である。祝梅川小野遺跡の竪穴住居跡(2)の内ひとつは、カリンバ型住居とみなされるものである。

アイヌ文化期 祝梅川小野遺跡では、平地式住居跡(3)、灰集中(2)、柱穴(50)、道跡(1)などが検出されている。住居の壁際では40点程の棒状小石がまとまって出土している。穂別D遺跡では柱穴(11)、焼土(6)の周囲から鉄製鎌、鉄製針、銅製品(形状不明)、土玉などが検出されている。西島松2遺跡には、鉄刀などの鉄製品が副葬された墓坑(2)がある。ともに伸展葬を想定できる墓坑の大きさである。梅川4遺跡のB地区、C地区では道跡に沿って、柱穴(143)、焼土(68)などが検出され、キセルの雁首、クギと見られる鉄製品、陶磁器片が出土している。

継続整理・報告書作成

白滝遺跡群、西島松5遺跡、館野遺跡については、継続して膨大な資料群の整理を行い、順次報告書を刊行している。館野遺跡は平成16年度に調査したものの整理作業である。平成17年度、18年度に調査を行った天寧1遺跡の貝塚を含むすべての整理作業が終了し、報告書を刊行する。

柏木川4遺跡で平成18年度に出土した繊維製品は、クリーニングの過程で「編み」の様相が見えはじめている(口絵)。



2 調査遺跡

千歳市 オルイカ2遺跡 (A-03-280)

事業名：一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財調査

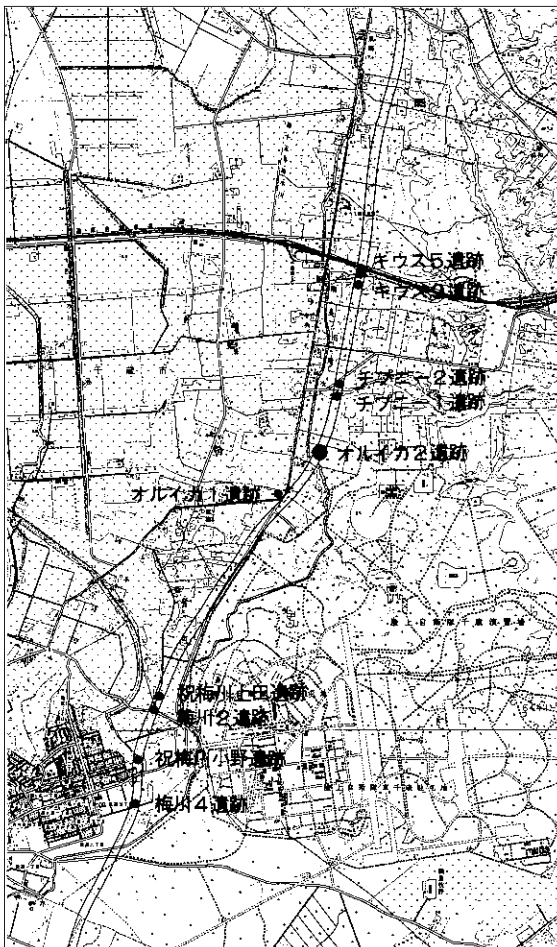
委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央1196-1ほか

調査面積：4,200㎡

調査期間：平成19年5月17日～9月12日

調査員：三浦正人、鎌田 望



この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「長都」「千歳」を使用した。

遺跡位置図

掘りかけのものと考えられ、うち1基は大部分が次年度以降の調査範囲にある。焼土のほとんどは風倒による攪乱の窪みに立地している。V層上面で検出したフレイク・チップ集中からはフレイクを中心に遺物が2,538点出土した。

遺物は旧石器時代から擦文文化期のものがある。土器は縄文時代早期後半、中期後半、晩期後半のものや擦文土器など約17,000点出土したが、その90%以上を縄文時代晩期後半のものが占める。石器等は約3,000点出土した。典型的なものには石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、砥石、台石などがある。また、滑石製の玉2点、土製品2点と石製品が5点ある。旧石器157点のうち140点は、V層上面で検出したフレイク・チップ集中から出土した。

遺跡の概要

遺跡は千歳市街地から北東に約6kmの馬追丘陵西側裾部に位置する。河岸段丘の標高16~18mに立地する。調査範囲西側に接して南長沼用水が北流し、その南側は平成14・16年度に調査を行い報告済の部分である。

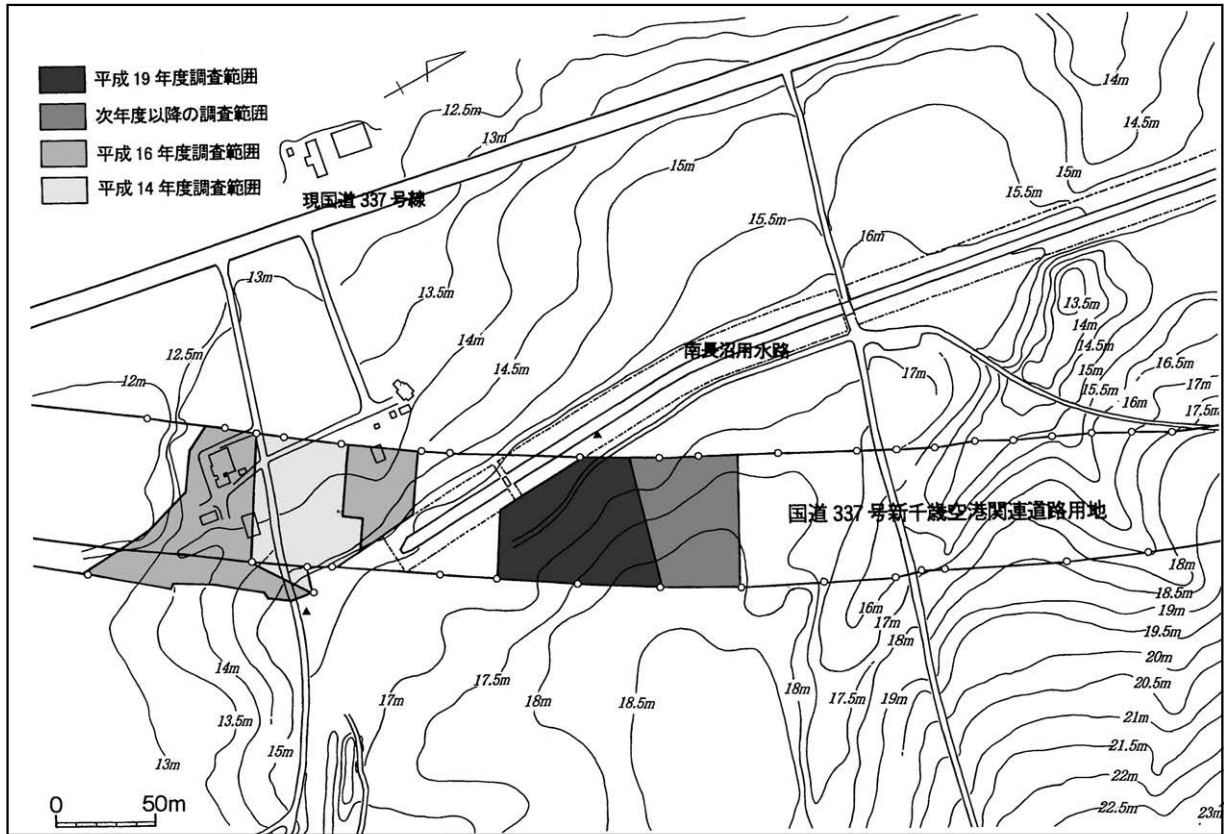
基本土層は地表面からI層：表土、II層：樽前a降下軽石層(Ta-a)、III層：第1黒色土層、IV層：樽前c降下軽石層(Ta-c)、V層：第2黒色土層、VI層：漸移層、VII層：恵庭a降下軽石風化ローム層、VIII層：恵庭a降下軽石層(En-a)である。遺物包含層はIII層(縄文時代晩期~アイヌ文化期)、V層(縄文時代)である。

遺構と遺物

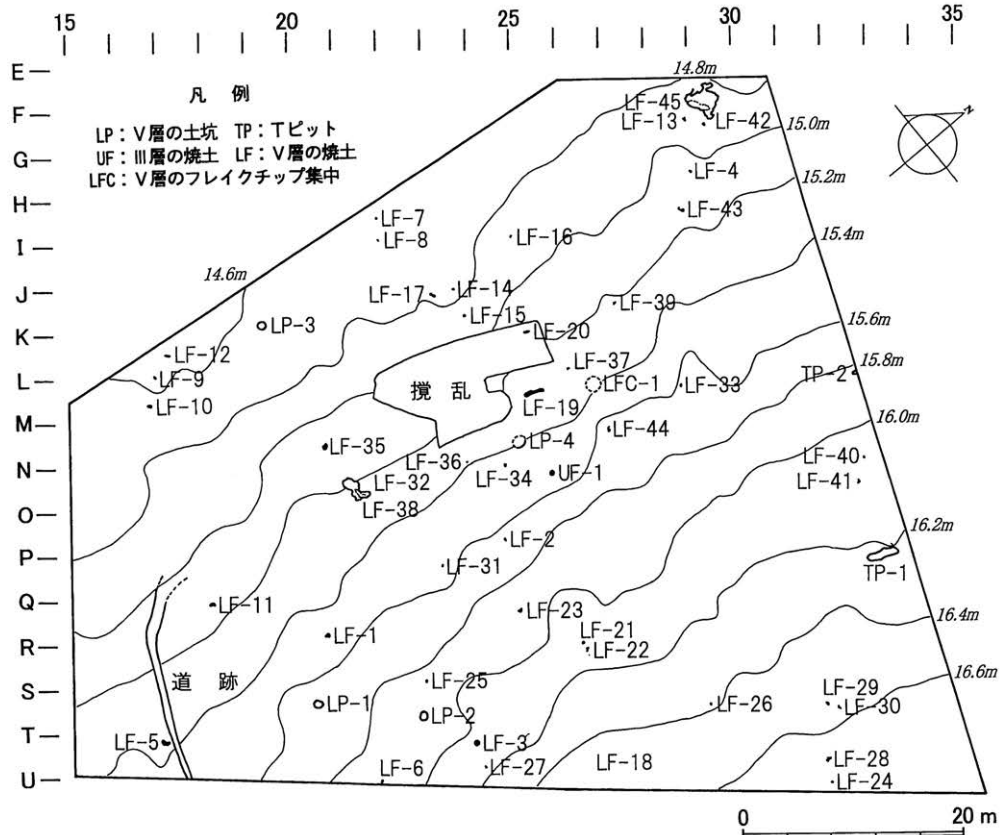
遺構は、土坑4基、Tピット2基、焼土46か所、フレイク・チップ集中1か所と道跡がある。このうち焼土1か所と道跡はIII層、TピットはVII層上面、ほかはV層で検出した。

III層上面が窪んだ状態で検出した道跡1条は、層位からはアイヌ文化期の所産と考えられるが、その上のI・II層が現代の攪乱を受けており、現代の建設機械等の走行跡の可能性もある。

土坑は周辺の遺物出土状況から縄文時代晩期後葉のものとして推定した。VII層上面で検出したTピット2基は



遺跡周辺の地形と調査範囲



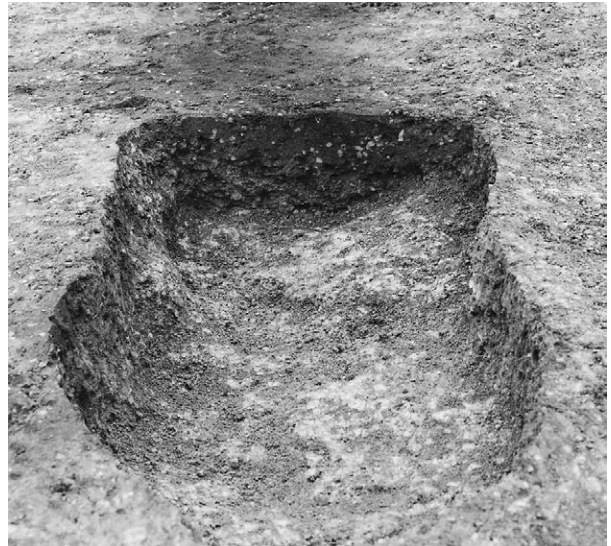
最終面（Ⅶ層上面）の地形と遺構位置図



調査状況



LP-1 土層断面



TP-1 土層断面



LF-45土層断面



Ⅲ層遺物出土状況

ちとせし
千歳市 キウス5遺跡（A-03-93）

事業名：一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央1287-7ほか

調査面積：6,100㎡

調査期間：平成18年5月7日～10月30日

調査員：三浦正人、鎌田 望、愛場和人、末光正卓、広田良成

遺跡の概要

遺跡は千歳市街地から北東に約8km、馬追丘陵西側裾部のキウス川右岸に位置する。標高は6～40mである。平成6～10年度に高速道路建設に伴う発掘調査を当センターと千歳市教育委員会が行っており、55,885㎡が既調査である。対岸には平成17・18年度に調査を行ったキウス9遺跡がある。

今回の調査は国道337号線の新ルート建設工事に伴うもので、丘陵端部の台地部とキウス川沿いの低位部が対象である。平成15年度（5,000㎡）、16年度（1,056㎡）、17年度（3,200㎡）に引き続き4年目の調査で、今年度は台地部6,100㎡を調査した。調査は次年度以降も継続する予定である。

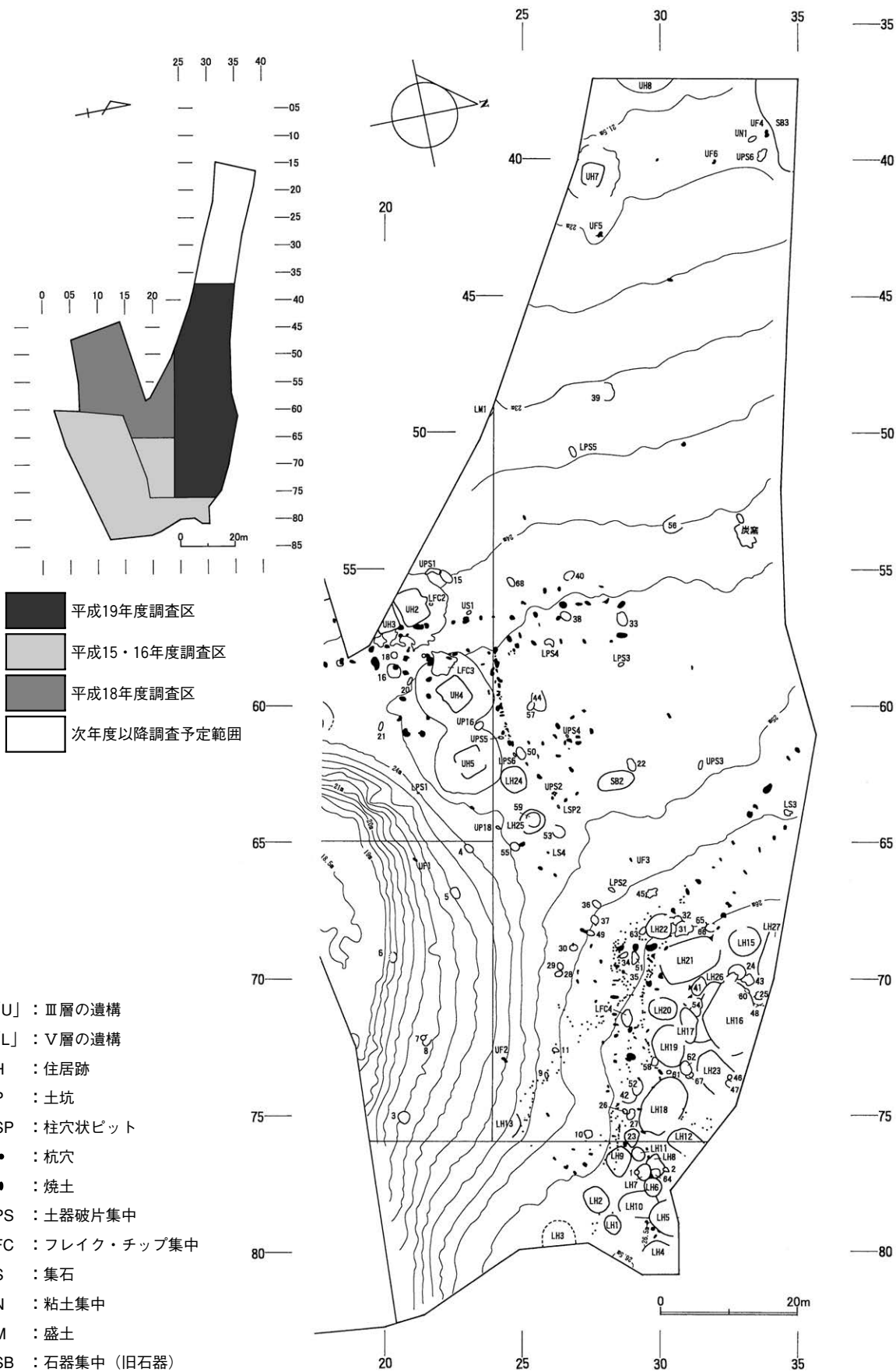
台地部の基本土層は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：樽前a降下軽石層（Ta-a）、Ⅲ層：第1黒色土層、Ⅳ層：樽前c降下軽石層（Ta-c）、Ⅴ層：第2黒色土層、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：恵庭a降下軽石風化ローム層、Ⅷ層：恵庭a降下軽石層（En-a）、Ⅸ層：支笏軽石流堆積物層（Spfl）である。台地部ではⅢ・Ⅴ～Ⅶ層が主な遺物包含層である。

遺構と遺物

Ⅲ層の遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑1基、土器破片集中5か所、粘土集中1か所、焼土4か所を確認した。遺構の分布は、調査区西側に多い傾向がみられる。時期は、竪穴住居跡、土坑、粘土集中は擦文文化期と考えられる。また、土器破片集中の時期は縄文時代晩期と擦文文化期である。

Ⅴ層の遺構は、竪穴住居跡17軒、土坑49基、柱穴状ピット1基、杭穴226基、土器破片集中5か所、集石2か所、焼土148か所、フレイク・チップ集中1か所を確認した。時期は、竪穴式住居跡、土坑、焼土の多くが、縄文時代中期後半のものである。土器破片集中は縄文時代晩期のものが多い。遺構の分布は、調査区東側と調査区中央～南側の台地際で密である。特に平成15年度調査区に続く東側部分では、縄文時代中期の竪穴住居跡が近接しており、その周辺からは土坑、焼土、杭穴が検出されている。杭穴は平成8年度調査時に検出されたものに類似し、台地際から斜面にかけて列状に分布している。焼土の多くは被熱が著しく、列状に分布するものが複数みられる。また、Ⅴ層下位～Ⅶ層にかけて、後期旧石器時代の石器集中が2か所検出されている。

遺物は、土器が約76,000点、石器等が約36,000点の合計約112,000点出土している。土器は、縄文時代中期後半（天神山式・柏木川式）・晩期後葉、擦文土器が主体で、縄文時代早期・後期のものも少量みられる。石器等は、剥片石器はフレイク・チップが多く、製品は少量である。磨製石器では、破片を含め石斧が多く、礫石器では砥石が多い。これら以外の製品は比較的少量である。土製品には、土器破片を三角形ないし四角形状に加工したものなどがある。石製品では、蛇紋岩製の玉が特徴的である。旧石器は、オシヨロッコ型の細石刃核を含む細石刃石器群で、総計約20,000点出土している。器種は、細石刃、細石刃核、石刃、石核、彫器、搔器、磨製石斧、礫石器などがある。



遺構位置図



縄文時代中期後半の竪穴住居跡



LH-18完掘



LH-21炭化材検出状況



LP-29砥石出土状況



LP-38遺物出土状況



LP-44遺物出土状況



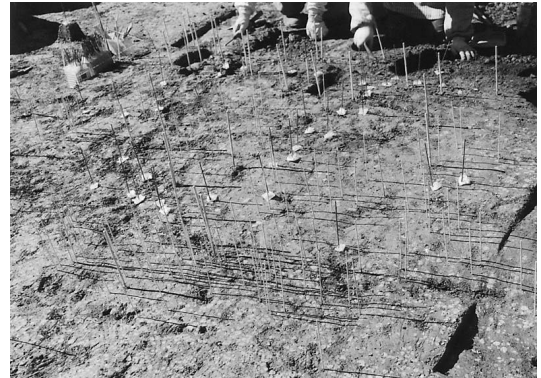
LP-58遺物出土状況



杭穴列完掘



SB-2 旧石器出土状況



SB-2 炭化材検出状況



SB-2 細石刃核出土状況

ちとせし しゅくばいがわおの
千歳市 祝梅川小野遺跡 (A-03-48)

事業名：一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市祝梅485-2番地ほか

調査面積：7,630㎡

調査期間：平成19年5月7日～平成19年10月31日

調査員：遠藤香澄、菊池慈人、芝田直人、酒井秀治、山田和史

調査の概要

遺跡は千歳市街地から約3km東に位置し、千歳川の支流である祝梅川の右岸段丘上、標高10～15mに立地する。遺跡全体は台地部と低湿部からなり、調査対象は台地部の7,630㎡である。調査区の地形は東側に平坦な台地がひろがり、西側の祝梅川に向かって緩斜面が形成されている。

基本土層は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：樽前a降下軽石層 (Ta-a)、Ⅲ層：第1黒色土層、Ⅳ層：樽前c降下軽石層 (Ta-c)、Ⅴ層：第2黒色土層、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：恵庭a降下軽石風化ローム層、Ⅷ層：恵庭a降下軽石層 (En-a) である。

遺物包含層はⅢ層とⅤ～Ⅵ層で、旧石器時代、縄文時代前期・中期・後期・晩期、続縄文時代、擦文文化期、アイヌ文化期の遺構・遺物を検出した。主体はⅤ～Ⅵ層が縄文時代前期、後期、Ⅲ層が縄文時代晩期、擦文文化期、アイヌ文化期である。遺物は約86,000点出土した。

遺構と遺物

縄文時代前期：後半の植苗式期の住居跡5軒と土坑を検出した。うち1軒 (LH-6) の床面からは土器2個体が出土している。植苗式は調査区のほぼ全域に分布するが台地上に多い。住居跡周辺の土坑5基からは、「サツマアゲ状土製品」と称される未焼成粘土塊が出土している。5～10個体がまとまって出土しており、遺跡全体では40個体程度になると思われる。

縄文時代後期：土器囲炉を伴う前葉(タブコブ式)の住居跡2軒と、中葉～後葉の住居跡2軒がある。いずれも掘込は明瞭でなく、炉跡と柱穴のみが認められた。中葉～後葉の住居跡は南側の緩斜面にあり、周辺から中葉の土器(ウサイクマイC式)を伴う土坑が見つかったほか、包含層からはウサクマイC式、鱈澗式、堂林式が多く出土している。特徴的な遺物として、加曾利B式の注口土器がある。

縄文時代晩期：竪穴住居跡2軒・土坑58基・土器集中6か所を検出した。竪穴住居跡は掘込が浅く、床面はⅤ層にある。土坑は調査区の東側と西側、北側の3か所にまとまる。このほとんどが墓と考えられる。そのうちの1基 (UP-56) には壺形土器が倒立した状態で埋設されていた。土器内部はほぼ空洞で、中には大型黒曜石剥片6点が認められた。他に口縁部片が折り重なった状態で出土したものや、棒状原石を伴う土坑が数基ある。包含層からは玉類・棒状原石・軽石製矢柄研磨器などが出土している。

擦文文化期：竪穴住居跡2軒、焼土2か所・集石3か所を検出した。1軒は焼失住居で南側にカマドをもち、支柱穴は竪穴内にある。他1軒は掘込が浅く、平面形が隅丸長方形、炉はなく、支柱穴は竪穴外の四隅にある。遺物は擦文土器が住居跡とその周辺で多く出土している。

アイヌ文化期：平地住居跡3軒・灰集中2か所・柱穴50か所・道跡1条を検出した。住居跡中央には灰混じりの地床炉がある。道跡は平地住居跡の間で確認され、南北方向に続いている。遺物はいわゆる「ピッ」と呼ばれる礫がまとまって出土している。

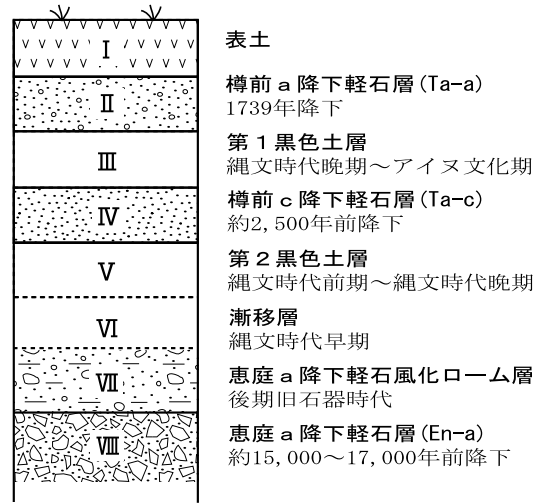
この他、Ⅴ～Ⅵ層で縄文時代の竪穴住居跡3軒、土坑48基、柱穴31か所、焼土12か所、Tピット6基を検出した。Tピットは溝型4基、小判型で逆茂木のあるもの2基が見つまっている。遺物は縄文時代前期後半、後期中葉～後葉の土器が多く、次いで中期末葉の土器が多い。石器は細石刃3点、彫器1点、

石刃1点の旧石器時代の遺物がある他、石鏃・石錐・つまみ付きナイフ、緑色泥岩製の石斧と原材や調整剥片などの関連遺物、北海道式石冠の被熱破片が多く、石錘も少量出土している。また、Ⅲ層の遺物は縄文時代晩期後葉～末葉の土器が多く、わずかに続縄文時代のものがある。

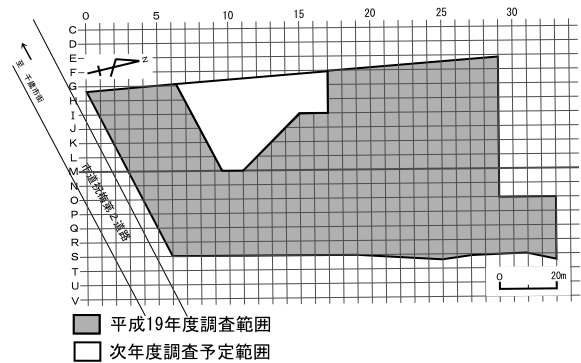


(国土地理院発行の5万分の1地形図「千歳」「恵庭」を使用)

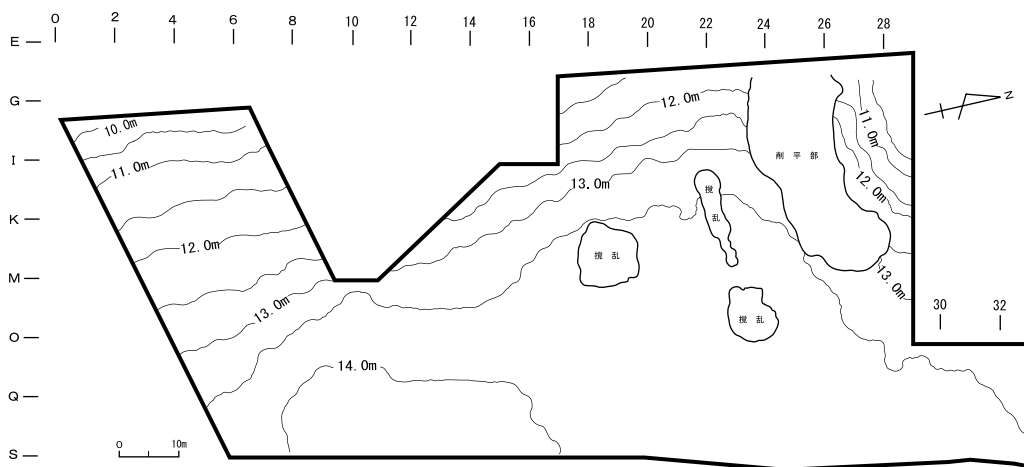
遺跡位置図



基本土層模式図

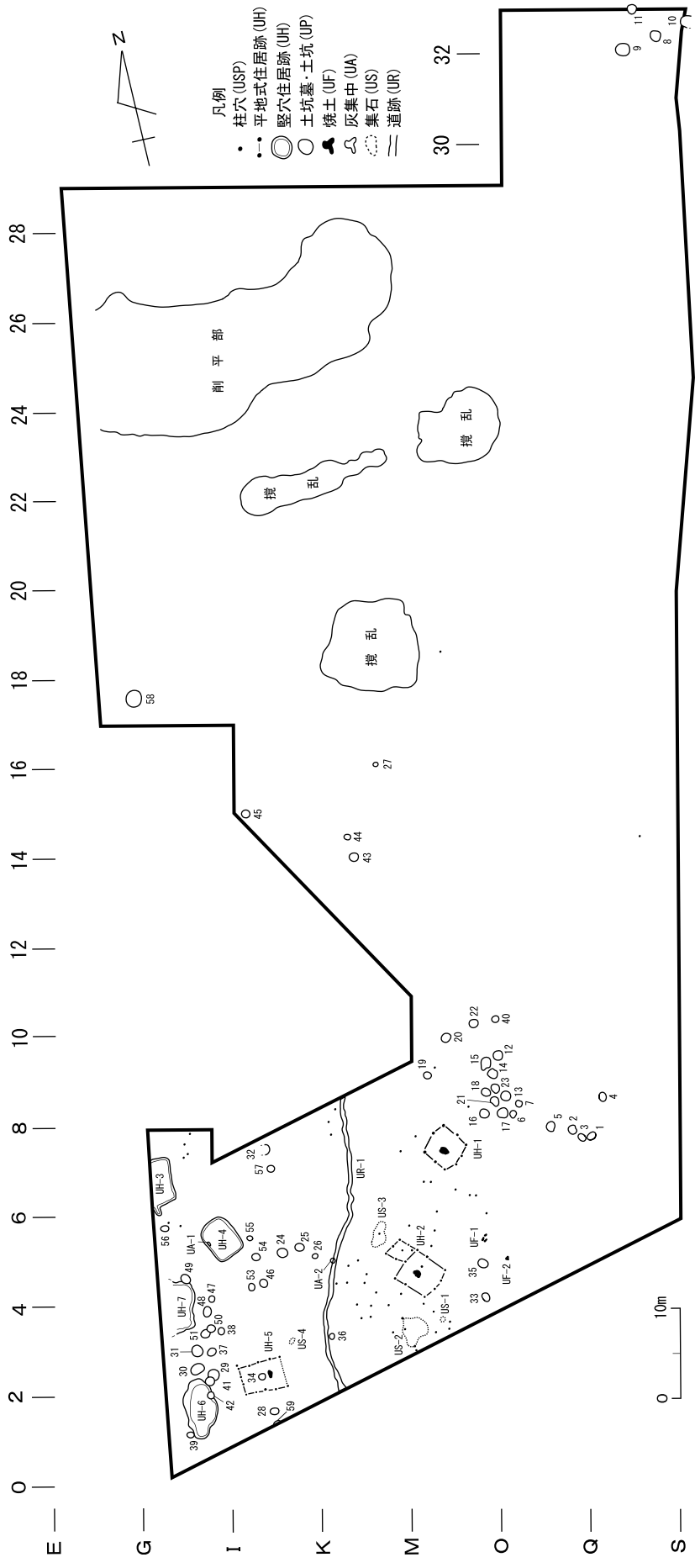


調査範囲図

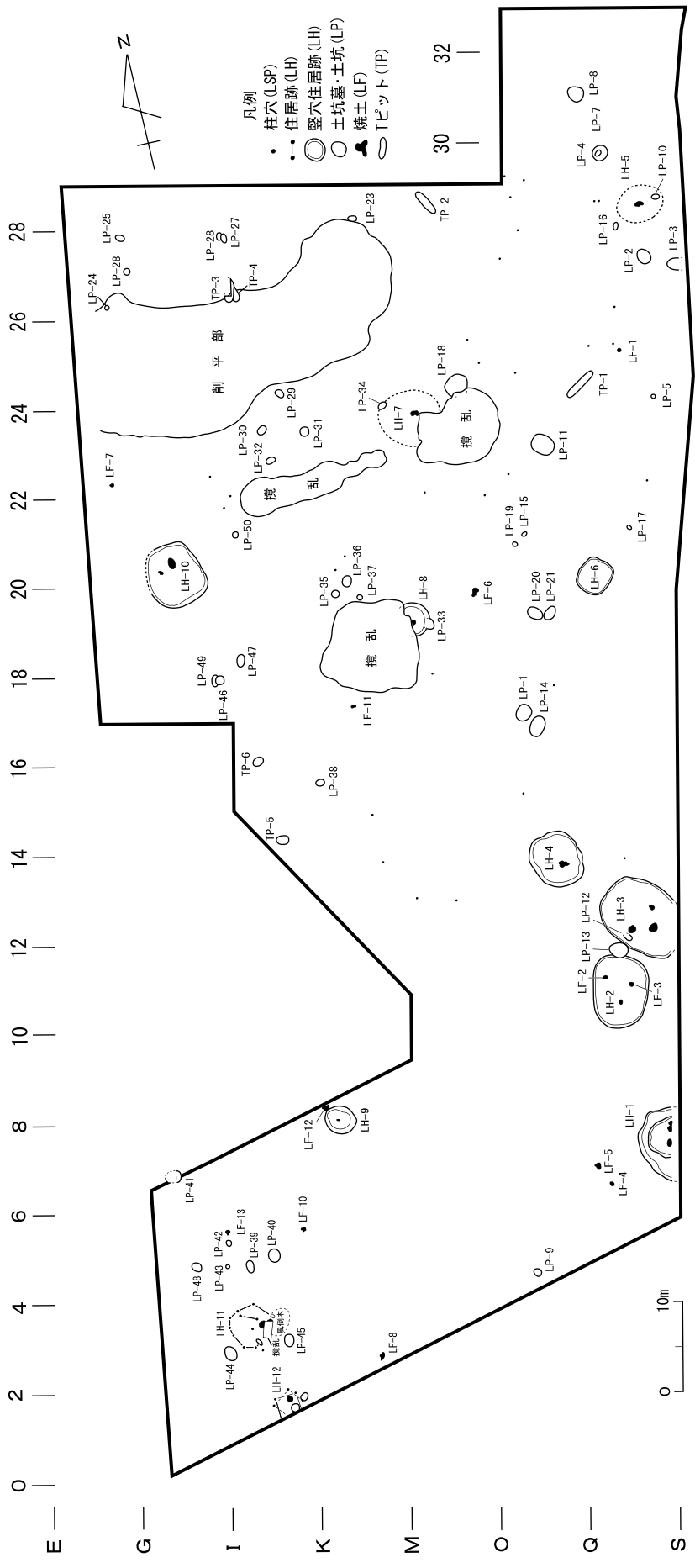


調査区地形図

※等高線はV層上面



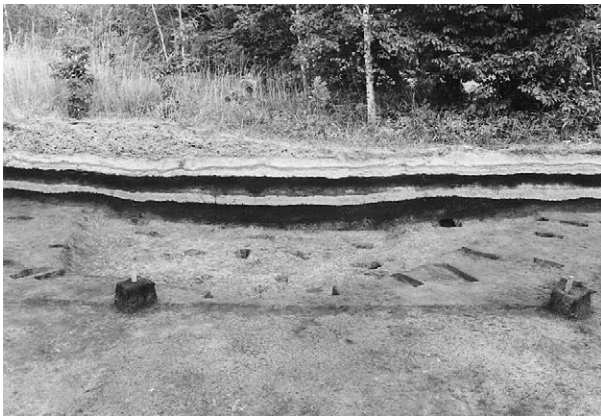
Ⅲ層遺構位置図 (縄文時代晩期～アイヌ文化期)



V層遺構位置図 (縄文時代前期～晩期)



調査区全景



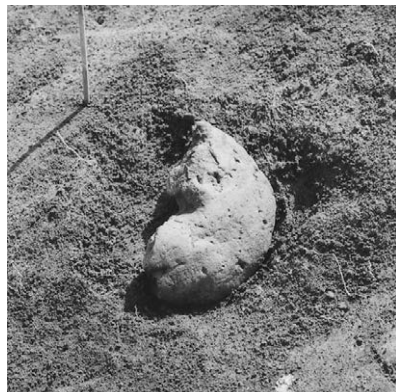
LH-1 完掘状況



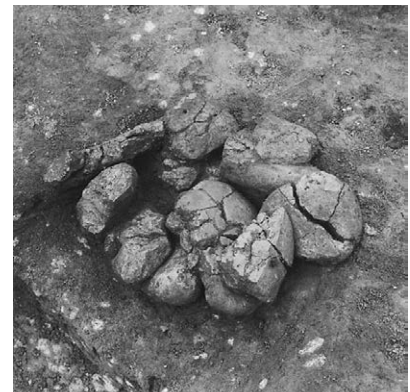
LH-2 (右)・3 (左) 完掘状況



LH-6 床面遺物出土状況



未焼成粘土塊出土状況





LH-5 土器圜炉検出状況



LH-7 土器圜炉検出状況



LH-11全景



LH-12全景



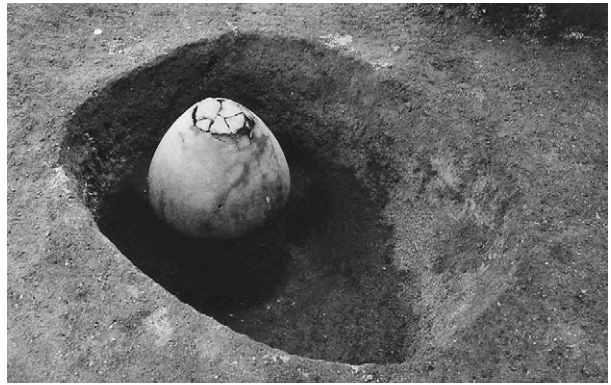
注口土器出土状況



縄文時代晩期の土坑群



UP-24遺物出土状況



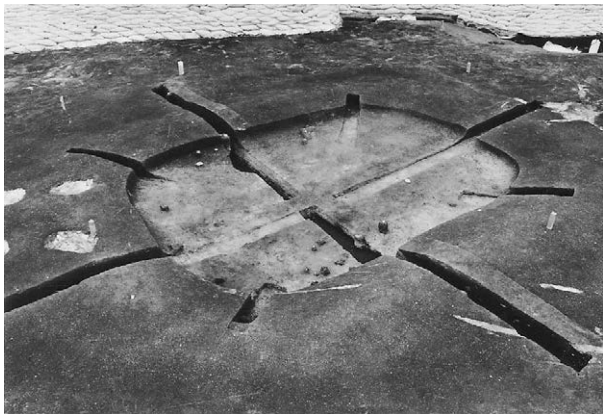
UP-56埋設土器検出状況



UP-56埋設土器内の大型黒曜石剥片出土状況



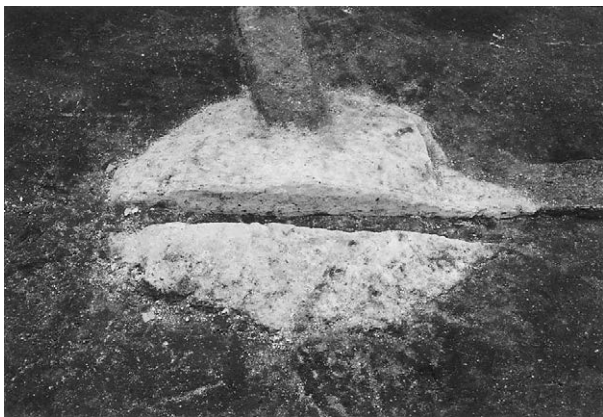
擦文文化期の住居跡調査状況



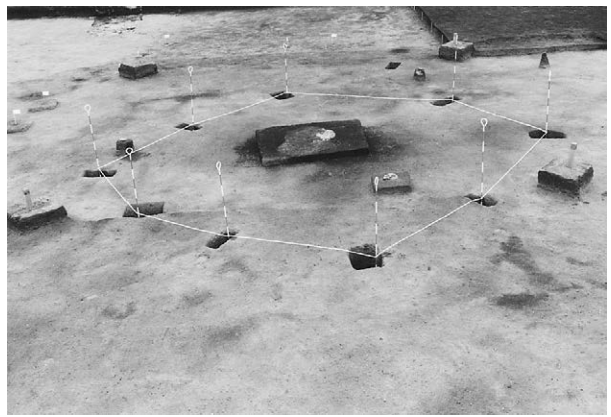
UH-4 全景



UH-3 炭化材検出状況



アイヌ文化期の灰集中 (UA-1)



UH-1 全景



UH-2 全景



UH-5 全景

ちとせし うめかわ
千歳市 梅川4遺跡 (A-03-59)

事業名：一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市祝梅2042-27・56・64・80・81、2047-55

調査面積：8,655㎡

調査期間：平成19年5月7日～10月31日

調査員：遠藤香澄、菊池慈人、芝田直人、酒井秀治、鈴木 信、宗像公司、阿部明義、山中文雄

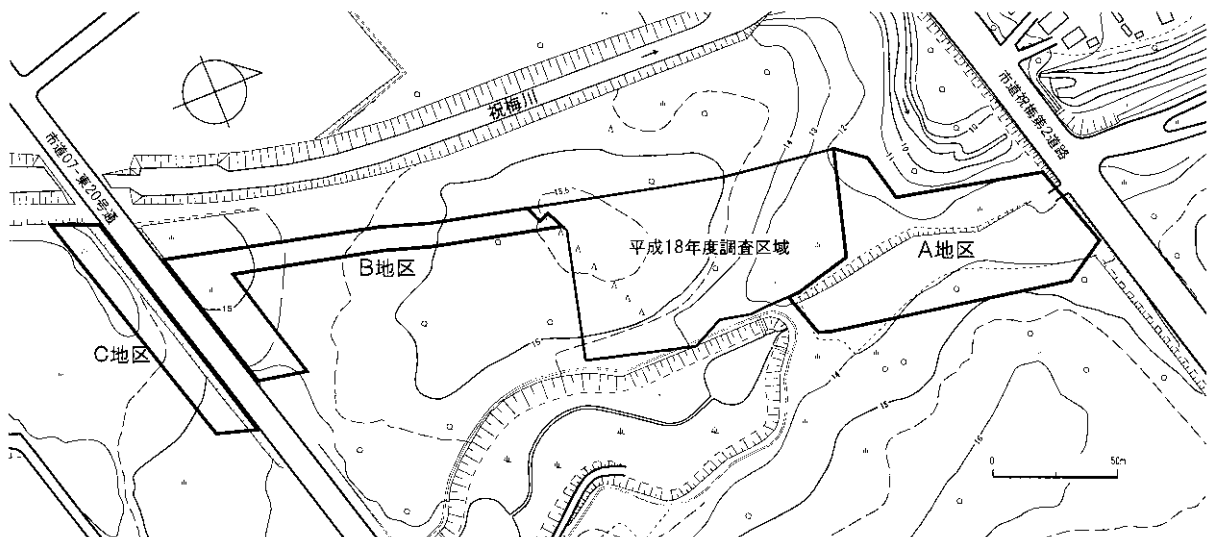
遺跡の概要

梅川4遺跡は、JR千歳駅の東約3km、梅川左岸と祝梅川源流部右岸の間の台地上に所在する。当センターでは、平成18年度に6,350㎡について発掘調査を実施し、今年度は、その北側(A地区)、南側(B地区)及び市道07-東20号通の南側(C地区)で発掘調査を実施した。また、基本土層は、市道祝梅第2道路を挟んで北側に所在する祝梅川小野遺跡とほぼ同じである。

遺構と遺物

A地区のⅢ層から検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑墓・土坑437基、土器集中2か所、石器類の集中6か所で、いずれも時代・時期は縄文時代晩期後葉のものである。竪穴住居跡は範囲が調査区域外に及ぶが、全体の形状は不整形と思われる。4か所の炉跡が確認され、複数回の立て替えが行われた可能性がある。土坑墓・土坑は、調査区域東側の台地上に集中して分布していた。土坑墓では、坑底でベンガラを検出したのが6基あった。その内、P-60では、側臥屈葬の姿勢を示し、他にもベンガラ中から人の歯(エナメル質)が出土した例が2基あった。また、ベンガラを伴わずに、人骨の一部が出土した例も1基でみられた。P-170では、埋土の上面から石剣が出土したほか、上面や周辺部から石斧や礫石器類が出土する例がみられた。土坑では、円形の平面形で、直径約0.8m、深さ最大で約0.8mで、掘りこみがⅧ層に達するものが多い。

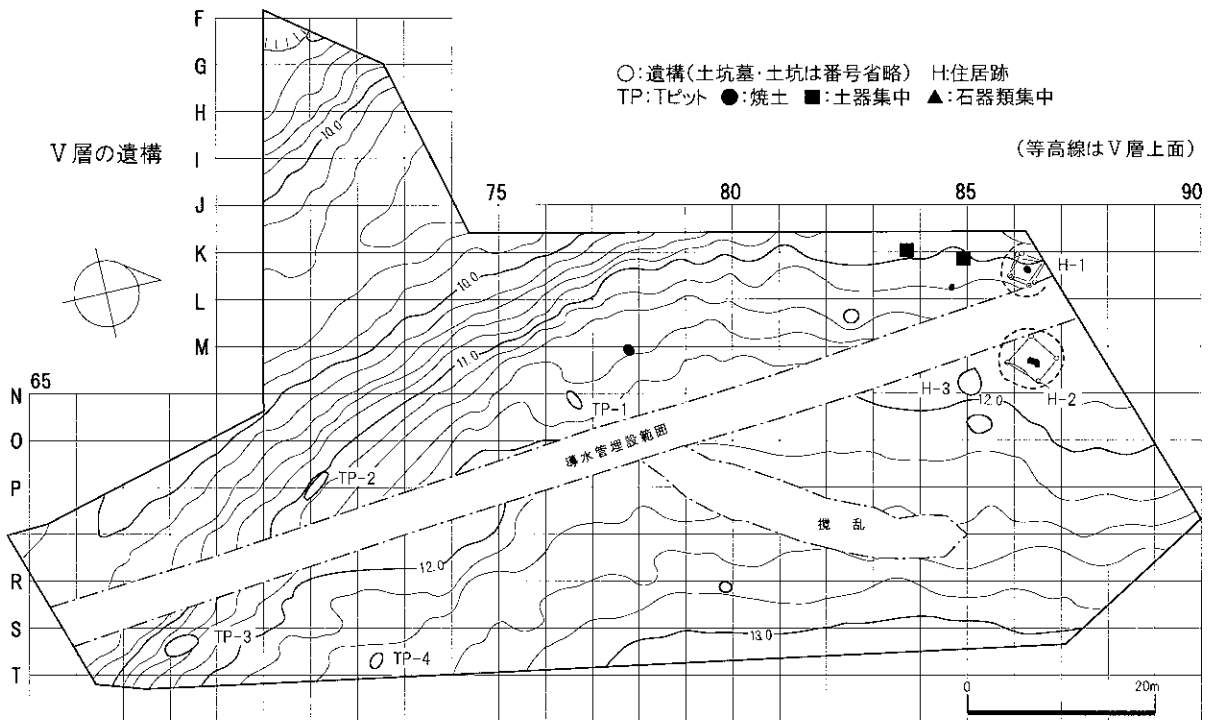
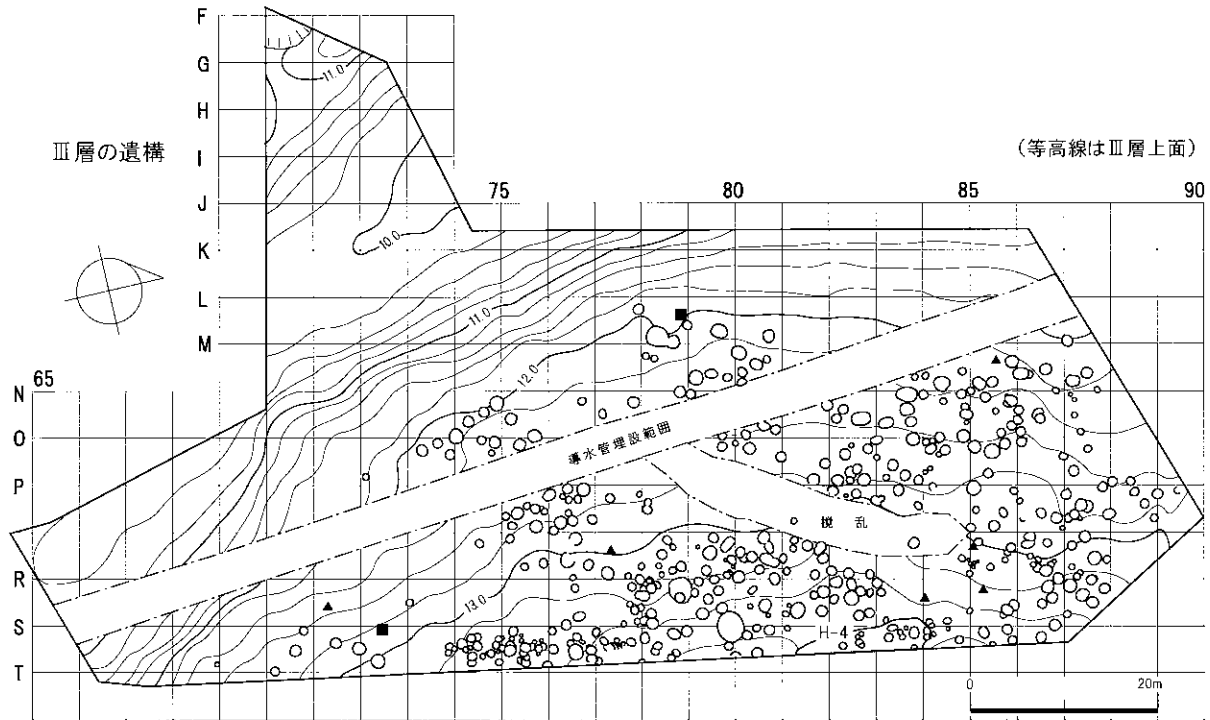
V層で検出した遺構は、竪穴住居跡1軒(縄文時代中期後葉)、平地住居跡2軒(縄文時代後期後葉)、土坑(縄文時代・時期不詳)、Tピット(縄文時代)、焼土2基(1基は縄文時代後期の可能性有)、土器集中2か所である。竪穴住居跡は長軸約3.5mの楕円形で、隣接して大型の土坑1基が構築されており、関連する遺構の可能性はある。平地住居跡は、調査区北西部で検出された。隣接する祝梅川小野遺跡でも同時期の平地住居跡が検出されおり、一連の集落跡と考えられる。Tピットは調査区域中央部の



調査区域と周辺の地形

西向き斜面に分布がみられ、いずれも平面形が小判形であった。

遺物は約276,000点（土器約208,000点、石器類約68,000点）で、約95%がⅢ層の遺構・包含層から出土した。遺物の分布は、Ⅲ層ではPライン以东75ライン以北、V層ではMライン以西80ライン以北で密である。Ⅲ層の遺構・包含層出土の土器は、ほとんどが縄文時代晩期後葉のものである。石器類では黒曜石製の石鏃、スクレイパーが多く、矢柄研磨器、有溝石製品（鏃石）も出土した。V層出土の土器では、縄文時代中期後葉、後期前葉・中葉・後葉、晩期のものがある。

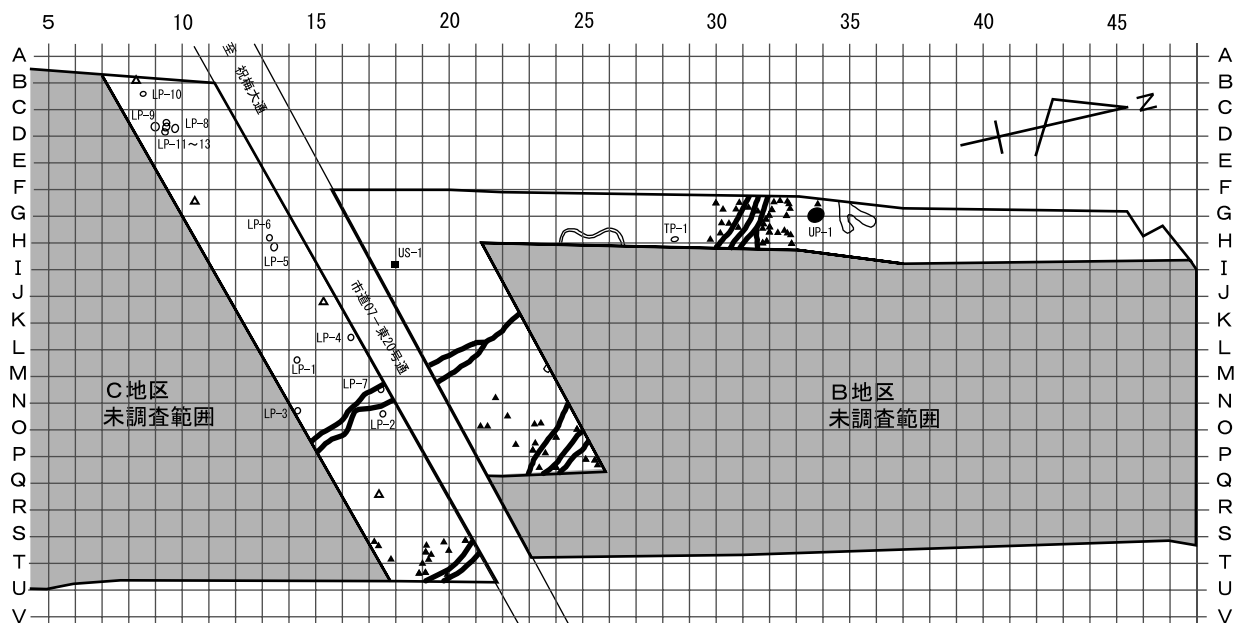


A地区遺構位置図

B地区のⅢ層から検出された遺構は、道跡（アイヌ文化期）、柱穴132基（アイヌ文化期）、焼土54か所（アイヌ文化期）、集石1か所（擦文文化期）である。道跡の周囲には、焼土や柱穴が集中して検出され、その一帯には獣骨やカワシンジュガイの殻皮が多量に出土している。焼土には灰集中を伴うものがある。V層から検出された遺構は、Tピット1基（縄文時代）である。また、近世以降の遺構として土坑1基、溝跡3条が検出されている。

C地区のⅢ層から検出された遺構は、道跡（アイヌ文化期）、柱穴11基（アイヌ文化期）、焼土14か所（アイヌ文化期）である。道跡はB地区から続くと考えられる。B地区と同様に、道跡の周囲には焼土や柱穴が集中して検出され、その一帯には獣骨やカワシンジュガイの殻皮が多量に出土している。焼土には灰集中を伴うものがある。V層から検出された遺構は、縄文時代中期とみられる土坑11基、焼土5か所、Tピット2基である。その内のLP-9では、坑底面から縄文時代中期後葉にあたる北筒式の土器片と炭化物が出土している。

遺物は、土器17,023点・石器等15,700点、合計32,723点が出土している。B地区北側のⅢ層からは続縄文時代前期の遺物、C地区のV層からは縄文時代中期の遺物が多く出土している。また、B・C地区のⅢ層からは、アイヌ文化期のキセルの雁首、クギと見られる鉄製品、陶磁器片、漆製品が道跡の付近から出土している。



凡例

- | | | |
|----------------|--------|-------------|
| □ : 平成19年度調査範囲 | Ⅲ層の遺構 | V層の遺構 |
| ■ : 未調査範囲 | — : 道跡 | ▲ : 焼土 |
| ∩ : 溝跡 | ● : 土坑 | ○ : 土坑・Tピット |
| | ■ : 集石 | △ : 焼土 |

梅川4遺跡B・C地区遺構位置図



A地区調査状況



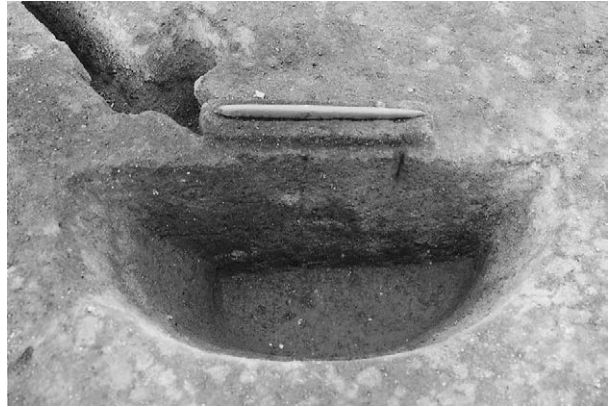
A地区Ⅲ層調査状況



A地区H-4 全景



A地区P-60のベンガラ



A地区P-170断面



A地区Ⅲ層土器集中 (L78区)



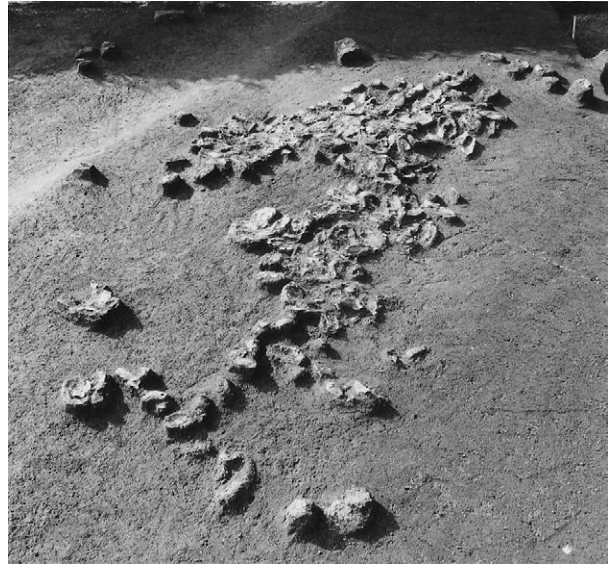
A地区H-2 全景



B地区調査状況



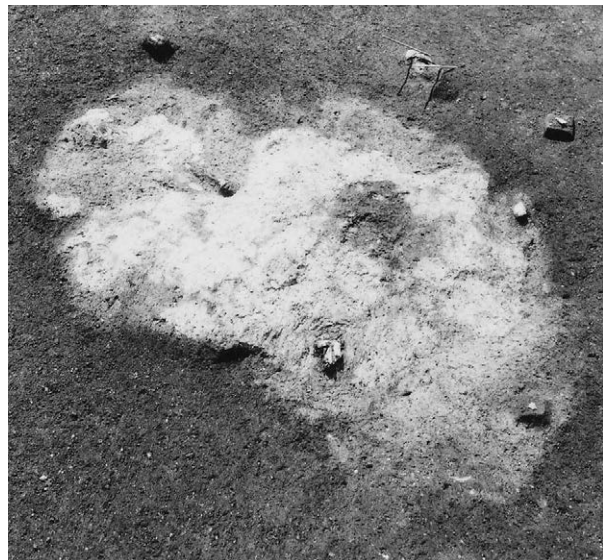
B地区道跡検出状況（Ⅲ層）



B地区カワシージュガイ集中検出状況（Ⅲ層）



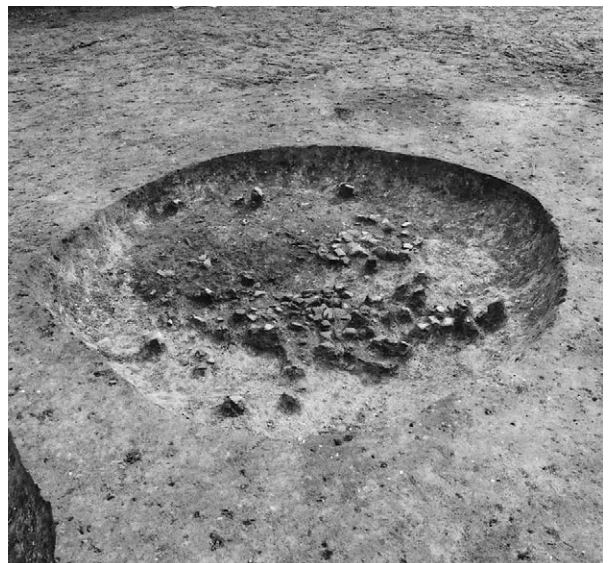
B地区キセル雁首出土状況（Ⅲ層）



C地区焼土検出状況（Ⅲ層）



B地区土器出土状況（Ⅲ層）



C地区LP-9（Ⅴ層）

えべつし ついしか
江別市 対雁2遺跡 (A-02-110)

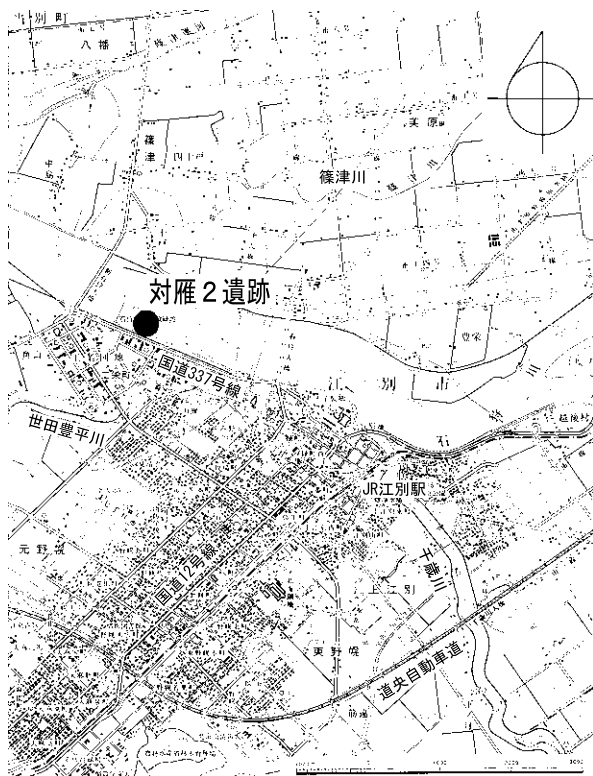
事業名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査
 委託者：国土交通省北海道開発局石狩川開発建設部
 所在地：江別市工栄町28番地地先（石狩川河川敷緑地内）
 調査面積：150㎡
 発掘期間：平成19年8月20日～9月21日
 調査員：芝田直人、酒井秀治

遺跡の概要

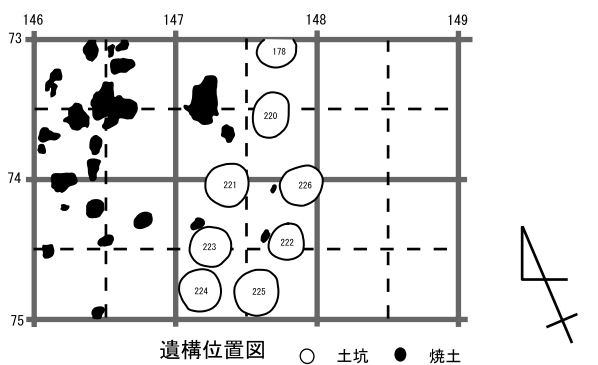
対雁2遺跡はJR江別駅の北西約4kmの石狩川左岸に位置する。世田豊平川（旧豊平川）との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約6～8mの自然堤防上の微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する1970年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近にあり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

調査の9年目にあたる。これまでの調査から、遺跡は縄文時代晩期中葉～続縄文時代後期にかけて形成されたと考えられる。今年度は、146～149線間15m×73～75線間10mの150㎡の発掘を行ない、続縄文時代前期の遺構・遺物が検出されている。遺跡の地層は自然堤防の形成に伴い、西側にある世田豊平川へ向かって落ち込んでいる。ほぼ同一時期の遺構・遺物が検出される生活面は、今年度の調査範囲において18面が認められた。生活面は、遺物の出土状況や放射性炭素年代測定結果から、ごく短いサイクルで形成されたと考えられる。土層は、上層部の風成堆積と下層部の季節的・周期的な水位上昇と考えられる水成堆積によって構成されている。上層部では粘土質、下層部では砂質が主となる。

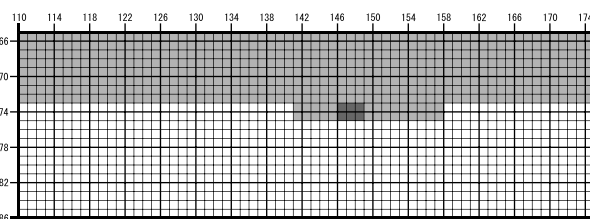
また、今年度をもって発掘調査が休止されることから、遺跡保護のため、未調査部分の外面に設けた法の強化するとともに、平成11年度に発掘に備えて表土を除去した部分を客土で被覆する処置を行なった。



遺跡位置図



遺構位置図 ○ 土坑 ● 焼土



調査範囲図

凡例

平成19年度調査範囲 (Shaded box) 未調査範囲 (White box)

調査終了範囲 (Dark shaded box)
 (平成11～18年度調査報告分)

平成19年度調査範囲・遺構位置図

遺構と遺物

今年度の発掘調査範囲からは、土坑8基、焼土28か所が検出されている。土坑の形状は円形や楕円形、規模は長径1.3～1.7mほどの大型のものが多い。すべてが自然埋没したと認められ、墓坑と推測できるものは検出されなかった。焼土には、燃料と見られる炭化材やクルミ殻などの炭化物、焼魚骨などの微細骨片を伴うものがある。また、焼土や炭化物が廃棄されたものも検出されている。

遺物は、土器708点、石器等1,001点、合計1,709点が出土した。土器は、深鉢・鉢・浅鉢が出土し、4個体が復元された。定形石器は、黒曜石・頁岩・チャートを石材とする石鏃・スクレイパーが多い。



調査風景



土坑完掘



焼土検出状況



遺跡保護工事状況

北斗市 館野 2 遺跡 (B-06-35)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道函館茂辺地道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：北斗市館野29-1ほか

調査面積：6,707㎡ (A地区：953㎡、B地区：3,406㎡、C地区：2,348㎡)

調査期間：平成19年5月7日～10月31日

調査員：佐川俊一、皆川洋一、新家水奈、佐藤 剛、立田 理

遺跡の概要

遺跡は北斗市街地から南南西方向に直線で約3.5kmの海に面した海岸段丘上(標高49～58m)に立地する。調査範囲は南北に長く全長314mに達することから、調査は無名の沢で区切ったA、B、Cの3地区に分けて実施した。土層はI～V層に分けられ、遺構・遺物の大半はⅢ層(腐植土)とV層(黄褐色ローム)から見つかっている。調査の結果、旧石器時代、縄文時代前期後半、中期前半・後半、後期前半などの遺構・遺物が多数検出された。火山灰はⅡ層中から駒ヶ岳d火山灰が、またⅡ層とⅢ層の間ほどから白頭山-苫小牧降下火山灰(B-Tm・10世紀降下)が局所的に検出されている。

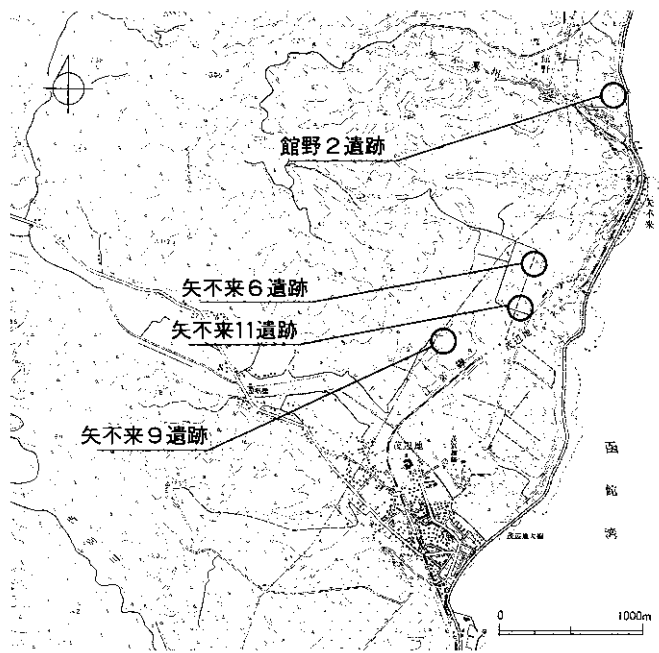
遺構と遺物

遺構は竪穴住居跡、土坑、焼土、集石、小ピットなどが検出されている(遺構一覧参照)。遺物は総数で数十万点になると推定される。旧石器は細石刃、彫器、石刃、土器は円筒土器下層d式、円筒土器上層b式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式、大安在B式、ノダツプⅡ式、涌元式など。石器は石槍、石鏃、ドリル、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、北海道式石冠、扁平打製石器、石皿、台石など。土・石製品は土偶、キノコ型土製品、石棒、石刀、玉、岩偶、自然遺物は動物遺存体が出土している。

A地区からは旧石器と縄文時代後期前葉の遺構・遺物が検出された。旧石器は頁岩製の彫器、細石刃、石刃13点で、図示したように約6mの範囲のV層上面から散点的に出土している。広がりには調査区外に及ぶ可能性がある。

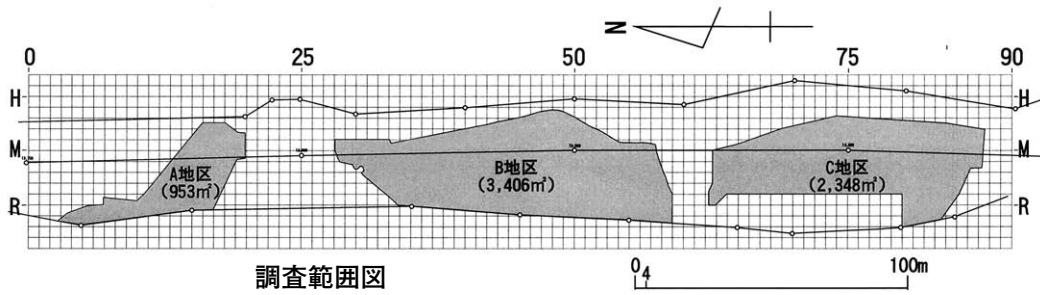
B地区からは竪穴住居跡、土坑、焼土、集石、小ピットなどの遺構が検出された。住居跡はほとんど縄文時代中期前半のものとみられるが、縄文時代後期前葉と考えられるものも1軒ある。このほか、縄文時代後期前葉の遺物が集中して出土する区域があり、この分布と同じくして、焼土、土坑、集石、小ピットが検出されている。遺物の時期は古いものから、縄文時代前期後半円筒土器下層d式、中期前半の円筒土器上層b式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式、後期前葉の涌元Ⅰ～Ⅱ式のものが出土している。

C地区からは竪穴住居跡、土坑、焼土、集石など多数の遺構が検出された。竪穴住居跡は円筒土器上層b式と大安在B式土器の時期が多く、これらは各集落を形成すると考えられる。この他にはサイベ沢Ⅶ式、見晴町式土器の時期のものも検出されている。土坑は墓と考えられるものやフラスコ状のもの、埋設土器を伴うものなどがある。

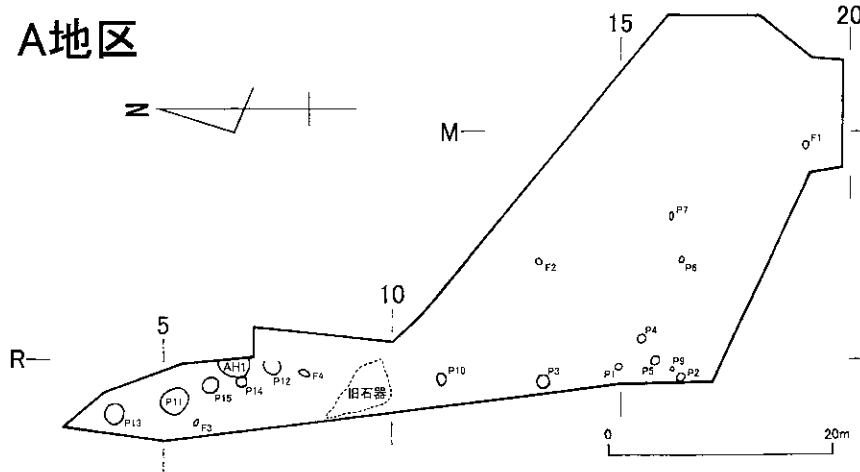


(国土地理院2万5千分の1「茂辺地」を加工して使用)

遺跡位置図



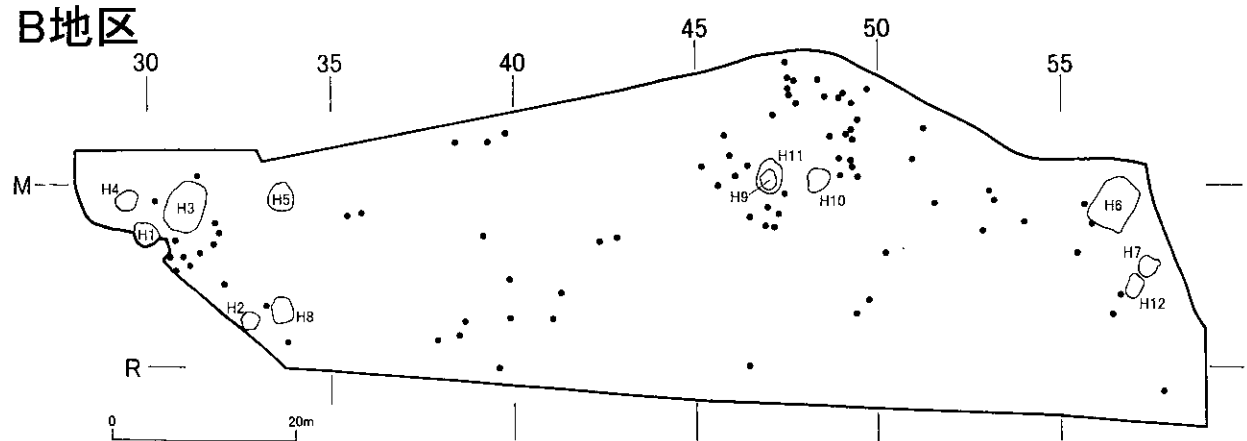
A地区



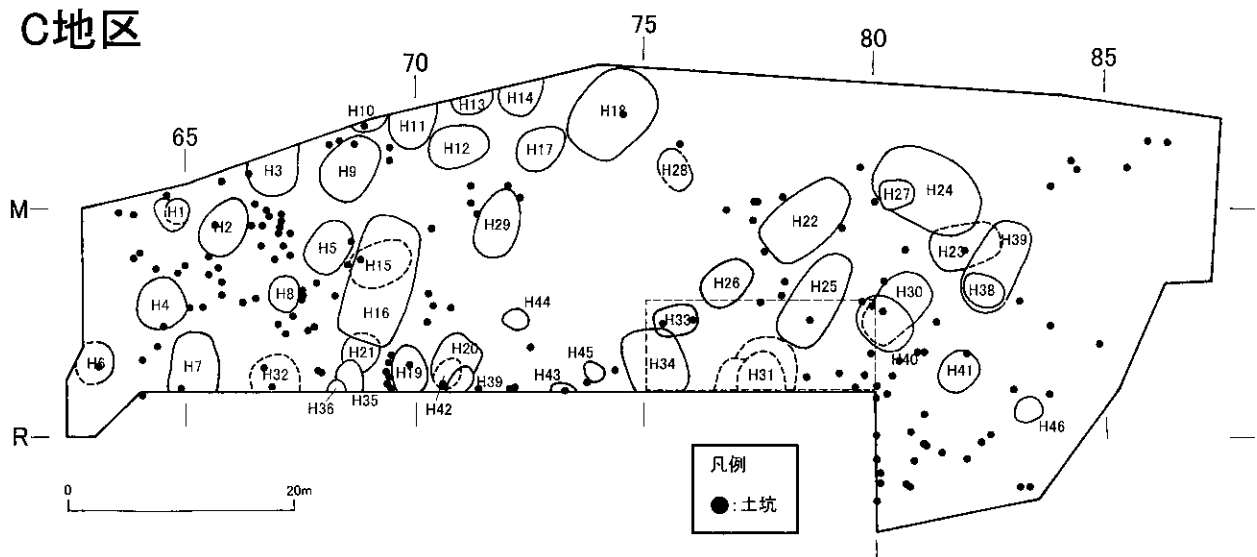
検出遺構一覧

地区	A	B	C	合計
住居跡(H)	1	12	46	59
土坑(P)	15	83	153	251
焼土(F)	4	32	92	128
集石(S)	0	13	5	18
柱穴状小ピット (SP)	0	84	30	114
フレイクチップ集中 (FC)	0	1	1	2

B地区



C地区

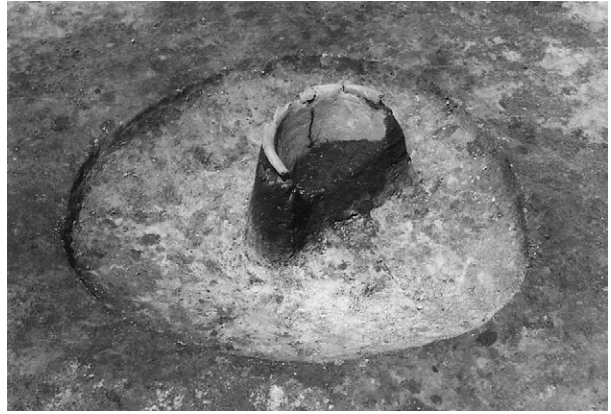


凡例
●: 土坑

遺構位置図



A 地区全景



A 地区土坑と出土遺物



A 地区細石刃出土状況



A 地区旧石器出土遺物



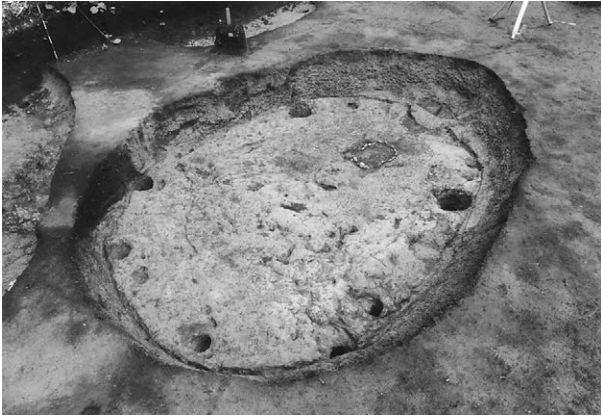
B 地区調査風景



B 地区遺物出土状況



B 地区炉跡検出状況



C地区住居跡



C地区フラスコ状土坑



C地区土器出土状況



C地区石製品出土状況



C地区全景

ほくとし やふらい
北斗市 矢不來 6 遺跡 (B-06-60)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道函館茂辺地道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：北斗市矢不來261ほか

調査面積：587㎡

調査期間：平成19年9月7日～10月31日

調査員：佐川俊一

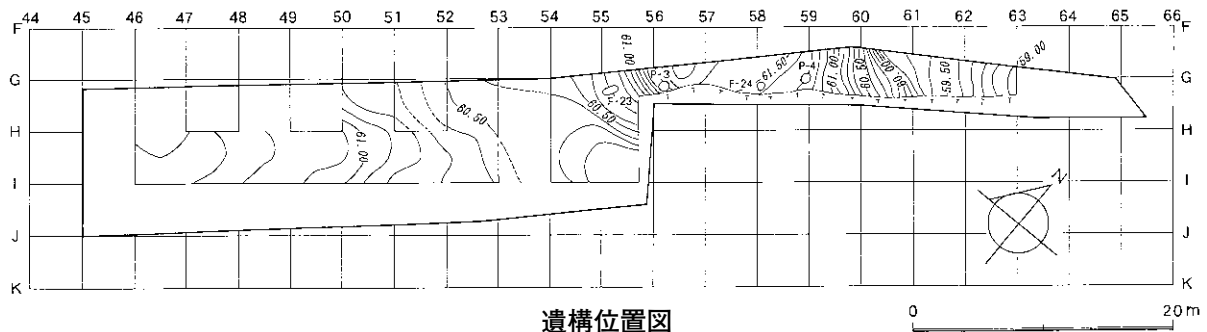
遺跡の概要

遺跡はJR上磯駅の南西約5kmの北斗市矢不來に所在する。矢不來11遺跡と隣接しており、北東側に矢不來6遺跡、南西側に矢不來11遺跡が位置する。平成17年度に矢不來11遺跡とともに本線部分の発掘調査を当センターが実施し、縄文時代前期、後期の遺構・遺物が検出されている。今回の追加調査は付加車線設置に伴うものである。

調査区は平成17年度の調査箇所隣接する北西部で、長さ80m、幅4～12mである。遺構が検出されたのは、調査区北西部の幅約4mの段丘部分である(写真右)。南西部は地山部分が削平を受けていたため全体を調査せず、部分的に調査した。遺構は検出されず、遺物もほとんど出土しなかった。なお、遺跡の基本土層は矢不來9遺跡に同じである。

遺構と遺物

遺構はピット2基、焼土2か所を検出した。主に55～59ライン間の標高61.50m付近に位置する。時期が推定できたのは縄文時代後期前葉の焼土1か所(F-24)のみである。ほかの遺構については、遺物を伴わず時期不明である。遺物は縄文時代後期の土器片と石器類合わせて380点出土している。



北斗市 矢不來 9 遺跡 (B-06-75)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道函館茂辺地道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：北海道北斗市矢不來415ほか

調査面積：2,030㎡

調査期間：平成19年8月1日～10月31日

調査員：佐川俊一、新家水奈、佐藤 剛

遺跡の概要

遺跡は、北斗市街地から南西へ直線で約6km、南側に位置する茂辺地の集落から直線で約1.5km、函館湾の海側から約750m内陸の段丘上（標高60～65m）に立地する。

矢不來の地名を付した遺跡は、14か所がすでに登録されている。このうち矢不來6・7・8・10・11遺跡が、平成16～18年度にセンターによって調査・報告されている。本遺跡は、来年度以降、調査区北側部分の継続調査が予定されている。

遺跡の基本土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：黒色土層、Ⅱ'層：白頭山-苫小牧降下火山灰(B-Tm)の二次堆積層、Ⅲ層：黒色土層(遺物包含層)、Ⅳ層：漸移層、Ⅴ層：黄褐色ローム質土層である。まれに、Ⅱ層中に駒ヶ岳d降下火山灰(Ko-d)が見られる。

遺構と遺物

遺構は、竪穴住居跡2軒(縄文時代中期1軒、後期1軒)、ピット20基、焼土21か所、集石1か所のほか、縄文時代後期前葉の遺物集中域1か所が見つかっている。遺物は、縄文時代中期～後期の土器片と石器類合わせて約25,000点が出土した。

出土遺物点数一覧

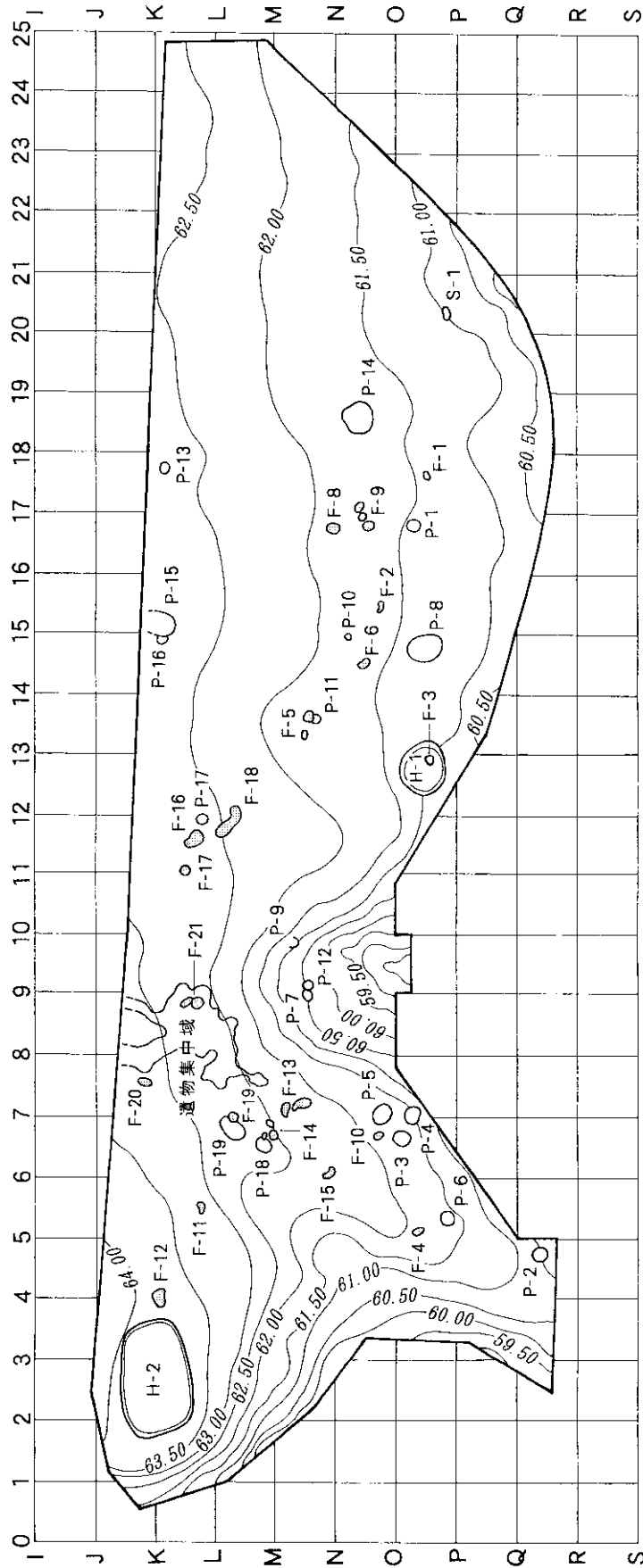
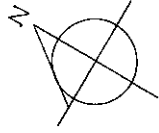
	土器	剥片石器	石斧	礫石器	土製品	石製品	計
遺構	1,195	190	2	703	146	1	2,237
包含層	14,584	2,034	22	6,104	9	2	22,755
計	15,779	2,224	24	6,807	155	3	24,992

土器内訳

	Ⅲ a	Ⅳ a	Ⅳ c	陶磁器	計
遺構	908	287			1,195
包含層	2,376	12,182	10	16	14,584
計	3,284	12,469	10	16	15,779

石器内訳

	石槍	石鏃	石錐	つまみ付きナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Uフレイク	Rフレイク	フレイク	石斧	たたき石	扁平打製石器	北海道式石冠	石鋸	石錘	すり石	砥石	石皿	台石	原石	加工痕のある礫	小礫	計	
遺構		6			3		5	10	166	2	2	9	1		1					1	2	297	387	893
包含層	2	31	3	7	50	1	57	42	1,841	22	80	48	5	1		5	4	5	4	23	38	4,366	1,525	8,160
計	2	37	3	7	53	1	62	52	2,007	24	82	57	6	1	1	5	4	6	4	24	40	4,663	1,912	9,053



遺構位置図



住居跡（縄文時代中期）遺物出土状況



調査区完掘状況

ほくとし やふらい
北斗市 矢不來11遺跡 (B-06-77)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道函館茂辺地道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：北斗市矢不來253ほか

調査面積：246㎡

調査期間：平成19年9月7日～10月31日

調査員：佐川俊一

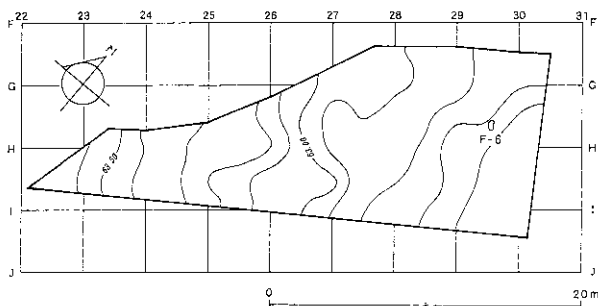
調査の概要

遺跡の位置、調査の経緯、基本土層については矢不來6遺跡に同じである。なお、当初予定していた調査区のうち東側の一部(約40㎡)については、現在使用している道路の付け替えが用地範囲内できなかったため調査を次回に繰り延べることとなった。

調査範囲は矢不來6遺跡と同様、平成17年度調査範囲の北側に隣接する部分である。地形は南西から北東に向かう緩い斜面となっている。調査区全体に縄文時代に相当する腐植土層の残存状況は良好であったが、出土遺物は僅少である。

遺構と遺物

検出された遺構は焼土1か所(F-6)のみである。焼土に伴う遺物は無いが、検出面がⅡ'層(B-Tm混じりの褐色土)上面であることから10世紀以降である。遺物は縄文時代後期の土器片と石器類合わせて126点出土した。



遺構位置図



F-6断面



調査状況



調査終了

ほくとし たての
北斗市 館野遺跡 (B-06-15)

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道函館茂辺地道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：北斗市館野3-3ほか

調査面積：8,565㎡（平成15年度5,750㎡、16年度2,815㎡）

整理期間：平成19年4月2日～平成20年3月31日

調査員：佐川俊一、富永勝也

整理の概要

平成16年度に検出された遺構は縄文時代中期末から後期にかけてのもので、遺物総数は約66万点である。今年度は後期初頭の盛土遺構から出土した遺物の一次分類と注記作業を進めている。特徴的な遺物として「双角状土製品」とでも称しうるものがある。盛土遺構から4点出土しており、大きさは器高3～6cmですべて下部（装着部？）に四穴の貫通孔がある。底面が幅広くなって、安定性を表現したとみならず、棒の先端に紐で括り付けた飾りを模したものと推定できる。

遺物 1



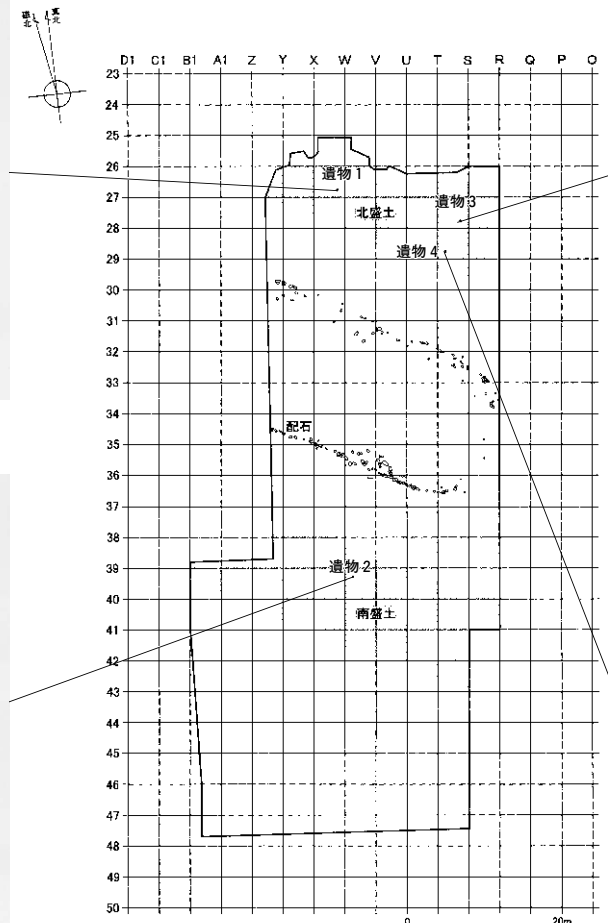
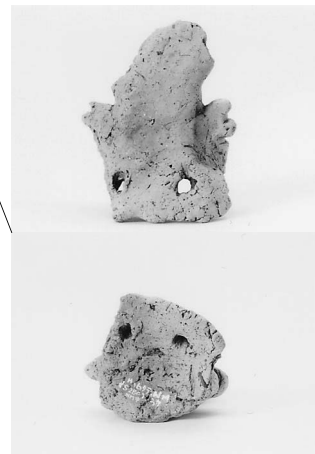
遺物 2



遺物 3



遺物 4



遺物出土位置図

しもかわちょう
下川町 サンプル4線遺跡（F-21-68）

事業名：天塩川サンルダム建設事業の内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局旭川開発建設部

所在地：上川郡下川町字珊瑠^{さんる}1530

調査面積：4,200㎡

調査期間：平成19年8月6日～10月31日

調査員：笠原 興、山中文雄

遺跡の概要

サンプル4線遺跡は、下川市街から北北東へ約4km、四線沢川がサンル川に合流する地点の南側にある。今年度はA地区（94㎡）、B地区（802㎡）、C地区（717㎡）、D地区（1,381㎡）、E地区（1,206㎡）の合計4,200㎡について調査を行った。

A・B地区は、どちらも土石流によって形成された段丘上にある。A地区の標高は158m前後、サンル川との比高はおよそ5mを測る。この地区の調査は、次年度以降の発掘に向けた予備的なもので、数本のトレンチによって包含層の範囲確認等を行った。B地区はA地区よりも50mほど四線沢川の上流側にあり、標高は161.5m前後である。トレンチ調査の結果、この地区では土石流堆積物中から石器が出土することが明らかになったので、土石流を重機で掘削し、その中に混在する遺物を人力で収集した。

C・D・E地区は、丘陵斜面の縁辺部に位置する。標高は162～167mである。包含層からは、主に珪化岩の剥片や礫片が出土している。

遺構と遺物

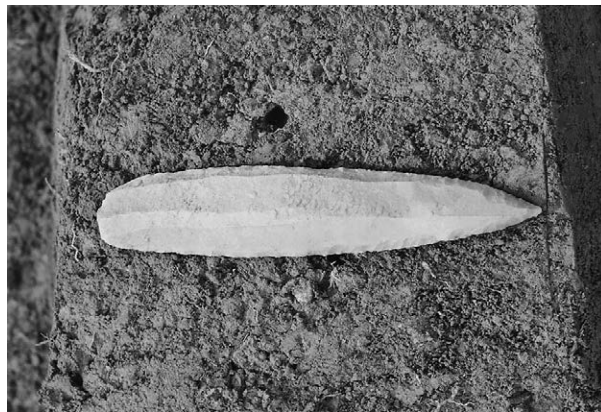
C・D・E地区において、珪化岩や黒曜石の剥片・石核が、比較的まとまっていたところが4か所程ある。出土した土層等からみて、いずれも縄文時代のもものと推測される。

遺物は約8,700点を数える。このうち、A・B地区の土石流堆積物中から収集した石器等は約5,000点である。珪化岩の剥片や礫片が大部分を占めるが、スクレイパーや石核等も少量ある。

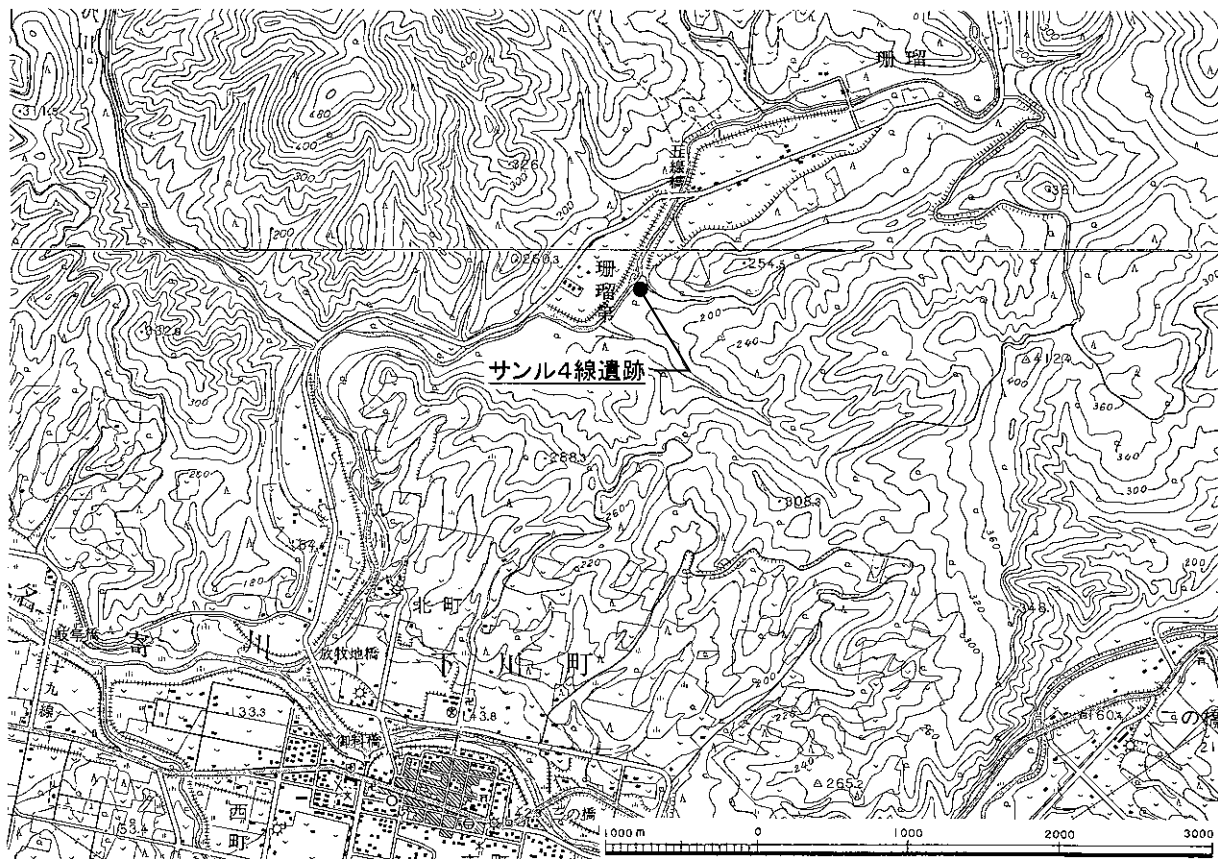
C・D・E地区からは、土器約200点、石器等約3,500点が出土している。土器は表面の磨耗したものが多く、押型文の施された破片が認められる。石器等の大半は珪化岩の剥片や礫片であるが、定形的な石器として、石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、磨製石斧、たたき石、砥石がある。石鏃や石槍には黒曜石、つまみ付きナイフやスクレイパーには主に珪化岩が用いられている。特徴的な黒曜石として、名寄産にみられる原石面が凸凹したものが目につく。この他、頁岩の石刃を素材としたスクレイパー（長さ16cm）など、旧石器時代の可能性がある遺物が数点出土している。



調査状況

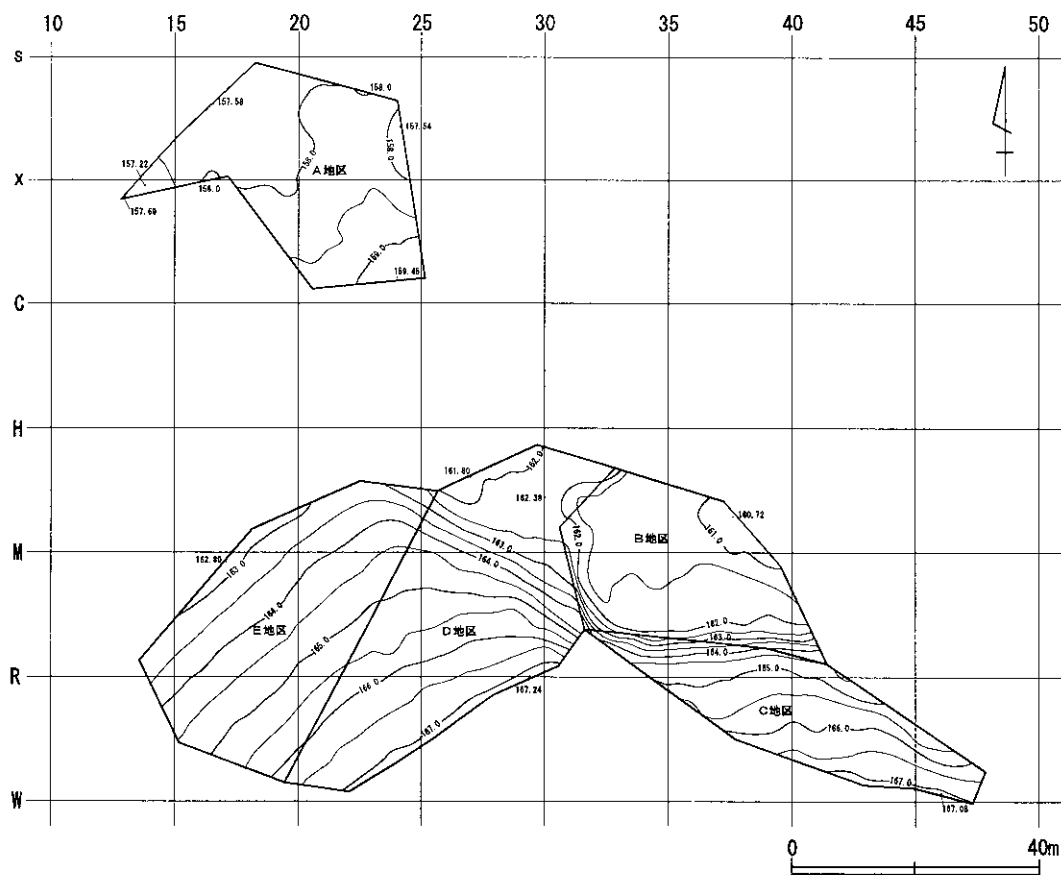


石器出土状況



遺跡位置図

国土地理院発行の5万分の1地形図「サンル」「下川」を使用



調査範囲地形測量図（表土除去後）

白老町 虎杖浜 2 遺跡 (J-10-1)

事業名：一般国道36号白老町虎杖浜改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所在地：白老郡白老町字虎杖浜333-1・740・741・753

調査面積：1,590㎡

調査期間：平成19年5月9日～7月27日

調査員：笠原 興、阿部明義

遺跡の概要

遺跡は白老町の西端部、登別市との境界に近い虎杖浜地区の標高約50mの段丘上に位置する。段丘の南北には倶多楽火山を源とするアヨロ川とポンアヨロ川が台地を開析している。遺跡の真下には、国道36号虎杖浜隧道が貫通している。虎杖浜2遺跡は古くから知られており、昭和52年(1977年)には白老町教育委員会による試掘調査が行われ、縄文時代前期の2か所の貝塚を有する大規模な集落跡の存在が確認されている。国道のオープンカット工事に伴い、その事前調査として平成9年(1997年)に白老町教育委員会、平成11～13・18年(1999～2001・2006年)に北海道埋蔵文化財センターが計9,290㎡の発掘調査を行った。

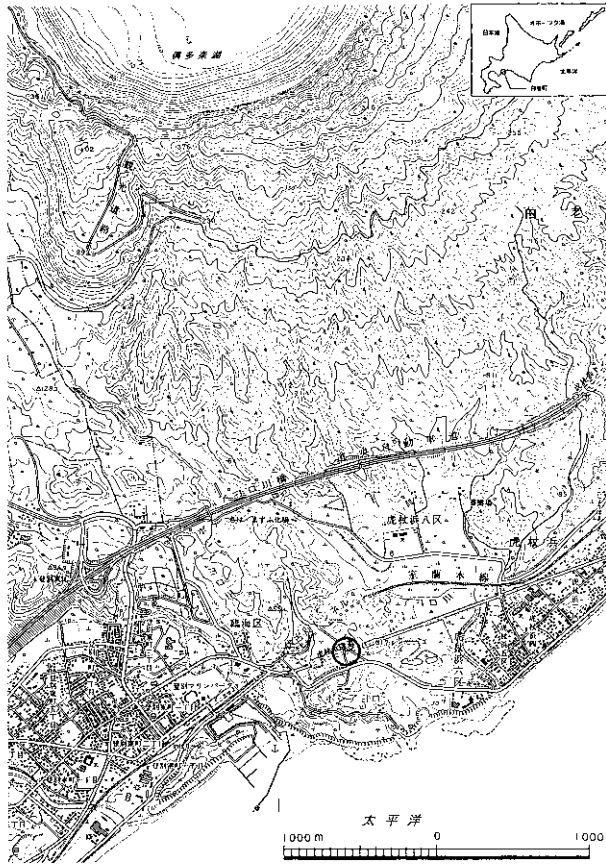
今年度の調査区は、過年度調査区の北～西側(山側)台地上である。調査区東部に町道北伏古一番線(旧国道28号)が通っており、調査期間後半に仮設道路に切り替えて路盤下を調査した。調査区中央部は以前の工事の進入路とみられ、掘削されている。調査区西部はおおむね平坦で、有珠b降下軽石層(1663年降下)下に遺物包含層である黒色土が30～50cm堆積している。

遺構と遺物

遺構は、盛土遺構、土坑7基、焼土29か所(うち盛土遺構中28か所)、フレイク・チップ集中1か所を検出した。盛土遺構は約30m四方の範囲で調査区東部に広がり、南北に尾根をもち、調査区外へと続いている。厚さは最大42cmで、全体ではおおむね20～30cm程度、西側はさらに薄い。黒色土とロームが混在し、大きくは2層、細かくは10層に分けられる部分がある。盛土遺構中には土器・石器、特に10cm前後の礫を多量に含む。また細かい焼骨片や炭化物も多く含まれる。盛土遺構より上位の包含層でも同様に遺物が多い。盛土の裾部では、焼土が列を成して検出された。また焼土付近からは、砂が密に浅く堆積している範囲が2か所、粘土の堆積範囲が2か所検出された。

土坑のうち2基は盛土遺構直下から検出された、縄文前期のものとみられる土坑墓である。どちらも長軸をほぼ東西にもち、断面はフラスコ状、坑底面は楕円形で西側が一段低くなっている。その西側寄りの坑底付近から、紐状および輪の形状を含む漆塗りの装飾品(塗膜のみ残存)が出土し、装身具または遺体の痕跡とみられる微細な骨片が出土した。そのほか、盛土遺構上から掘りこまれた土坑や、縄文早期～前期のやや浅い楕円形の土坑が検出された。

遺物は合計で約30,900点出土した。土器は約4,600点である。縄文前期の円筒土器下層a式を主体とし(土器の約78%)、ほかに静内中野式、縄文早期アルトリ式・中茶路式ほか、縄文中期天神山式の土器が出土している。石器等は約26,300点である。礫が10,800点(石器等の約41%)、フレイクが13,600点(同約52%)と多いが、定形石器ではつまみ付きナイフ・石鎌・石斧・石皿・台石・北海道式石冠・石錘が多い。特に盛土遺構上面で大型の石皿が目立った。そのほか、アイヌ文化期と推測されるガラス玉が1点攪乱部より出土した。また自然遺物として、盛土遺構中からシカを主体とした焼骨片・炭化物等を手取りおよびフローテーションにより回収した。

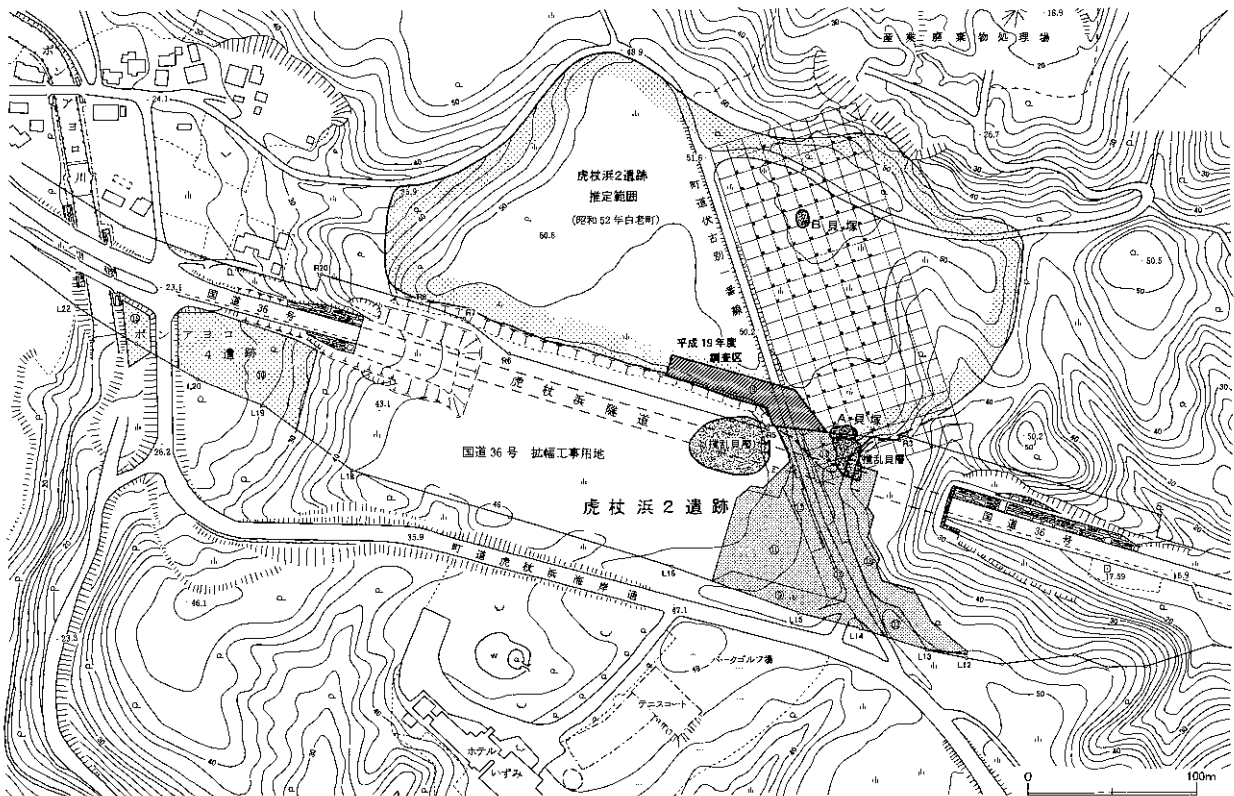


国土地理院発行の2万5千分の1地形図「登別温泉」を使用

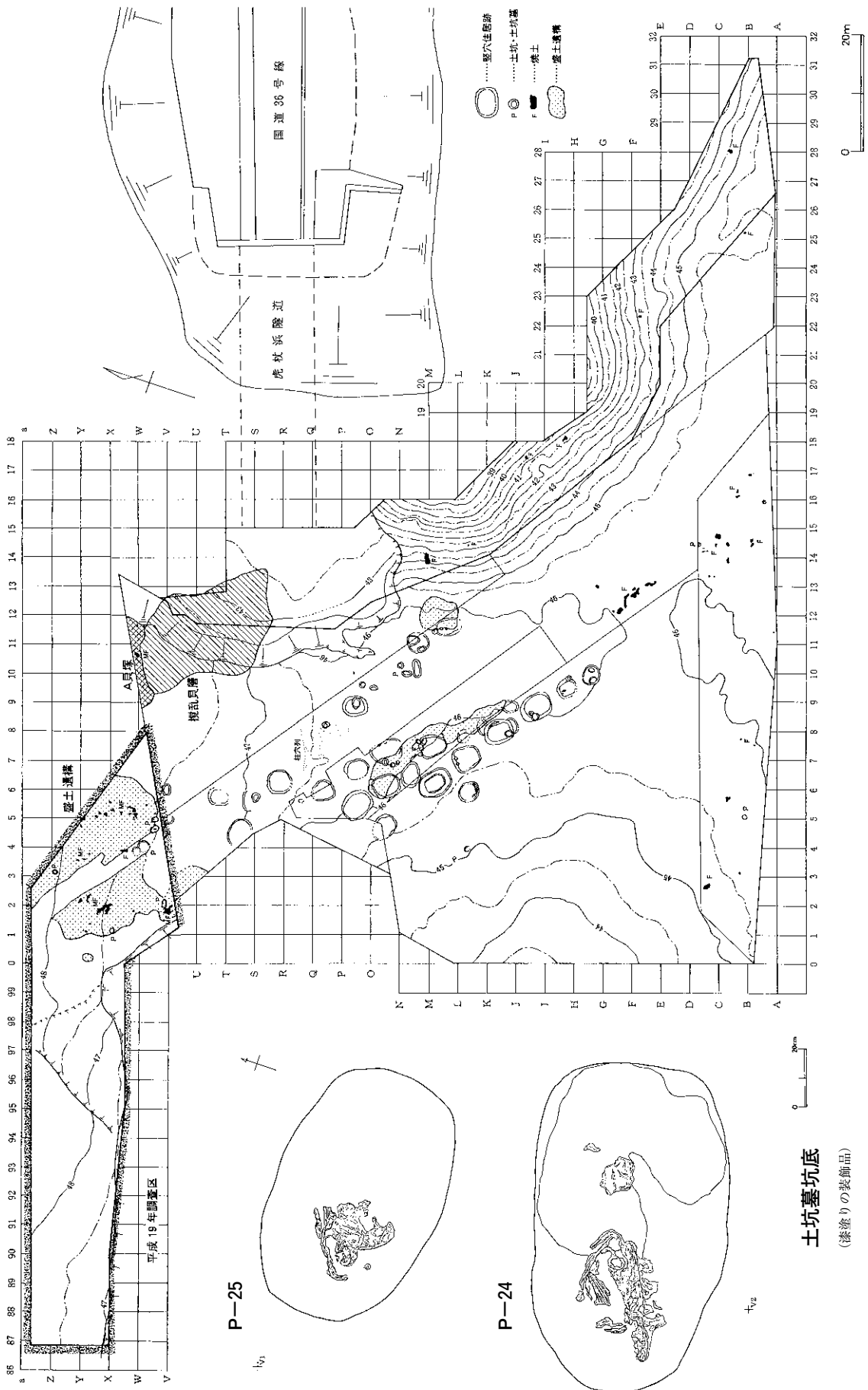
遺跡位置図



遺跡遠景



遺跡周辺の地形と調査区



遺構位置図 (平成9・11~13・18・19年度)



盛土遺構



土坑墓断面(P-24)



土坑墓坑底(P-25)

えんがるちよう しらたき
遠軽町 白滝遺跡群

事業名：一般国道450号白滝丸瀬布道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部

調査期間：現地調査：平成19年5月7日～11月20日

整理作業：平成19年4月1日～平成20年3月31日

調査員：熊谷仁志、中山昭大、袖岡淳子、坂本尚史、大泰司統、直江康雄

調査遺跡

遺跡名（登載番号）	所在地	調査面積	調査期間
旧白滝5遺跡（I-17-150）	紋別郡遠軽町旧白滝417	2,260㎡	平成19年5月7日～9月10日
ホロカ沢I遺跡（I-17-149）	紋別郡遠軽町旧白滝400	4,331㎡	平成19年8月7日～11月20日
旧白滝15遺跡（I-17-215）	紋別郡遠軽町旧白滝316	4,670㎡	平成19年6月29日～10月31日
旧白滝16遺跡（I-17-216）	紋別郡遠軽町旧白滝191	1,821㎡	平成19年6月1日～6月29日
旧白滝1遺跡（I-17-146）	紋別郡遠軽町旧白滝188	2,800㎡	平成19年5月7日～6月5日

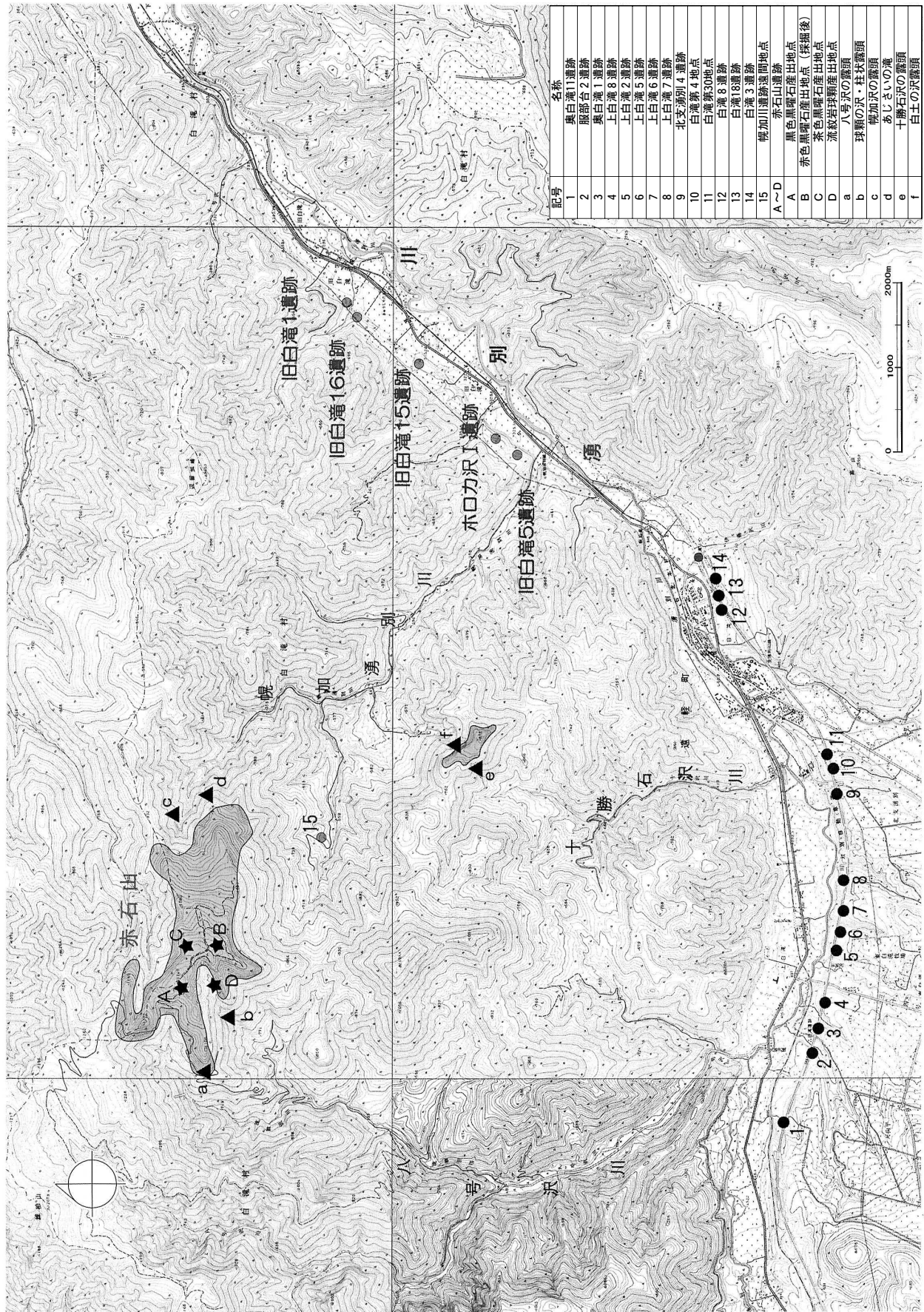
整理遺跡

遺跡名（登載番号）	所在地	遺物点数
白滝8遺跡（I-17-180、調査時の番号I-20-58）	紋別郡遠軽町白滝146-1、146-2	4,030点
白滝18遺跡（I-17-214、調査時の番号I-20-92）	紋別郡遠軽町白滝145、139-1	47,762点
白滝3遺跡（I-17-158、調査時の番号I-20-36）	紋別郡遠軽町白滝106他	4,271点
旧白滝5遺跡（I-17-150、調査時の番号I-20-28）	紋別郡遠軽町旧白滝413	平成15年度調査分 261,600点

白滝遺跡群の概要

遠軽町白滝地域は、北海道の屋根といわれる大雪山系の東北側山麓にある。白滝市街地の北西約6kmには国内有数の黒曜石の産地として知られる赤石山がある。白滝地域を東西に流れる湧別川とその支流である支湧別川の河岸段丘には、旧石器時代の遺跡が数多く所在し、「白滝遺跡群」と総称されている。特に赤石山に通じる八号沢と湧別川との合流点付近には白滝第13地点をはじめ、服部台、白滝第32地点、白滝第33地点など学史的に著名な遺跡が集中している。また1997年には新たに約20万㎡が国指定遺跡に追加され、すでに指定済みの「白滝遺跡」（白滝第13地点遺跡）と合わせて「白滝遺跡群」として名称変更された。当センターは高規格道路の建設に伴い平成7年から、白滝遺跡群を調査してきた。調査は上白滝地区を中心に始まり、調査面積はすでに100,000㎡以上になる。出土した石器は500万点、総重量は10トンを超える。

今年度は旧白滝地区の5遺跡を調査した。湧別川と幌加湧別川の合流点付近の旧白滝5遺跡。そこから湧別川下流側へ向かって順にホロカ沢I遺跡、旧白滝15遺跡、旧白滝16遺跡、旧白滝1遺跡が位置する。幌加湧別川の上流には、あじさいの滝、幌加沢の露頭など大規模な黒曜石露頭や、学史上有名な幌加川遺跡遠間地点が位置している。石材を獲得する上で、良好な環境にあると考えられる。



赤石山と遺跡の位置図

旧白滝5遺跡

旧白滝5遺跡は湧別川と幌加湧別川の合流点付近の河岸段丘面上、標高360～390mに立地している。遺跡は地形的特徴から段丘の高位部、中位部、高位から中位の間の中位部に区分できる。調査は平成15年度から開始され、平成15年度が高位部・斜面部・中位部、平成18・19年度が中位部を対象としている。

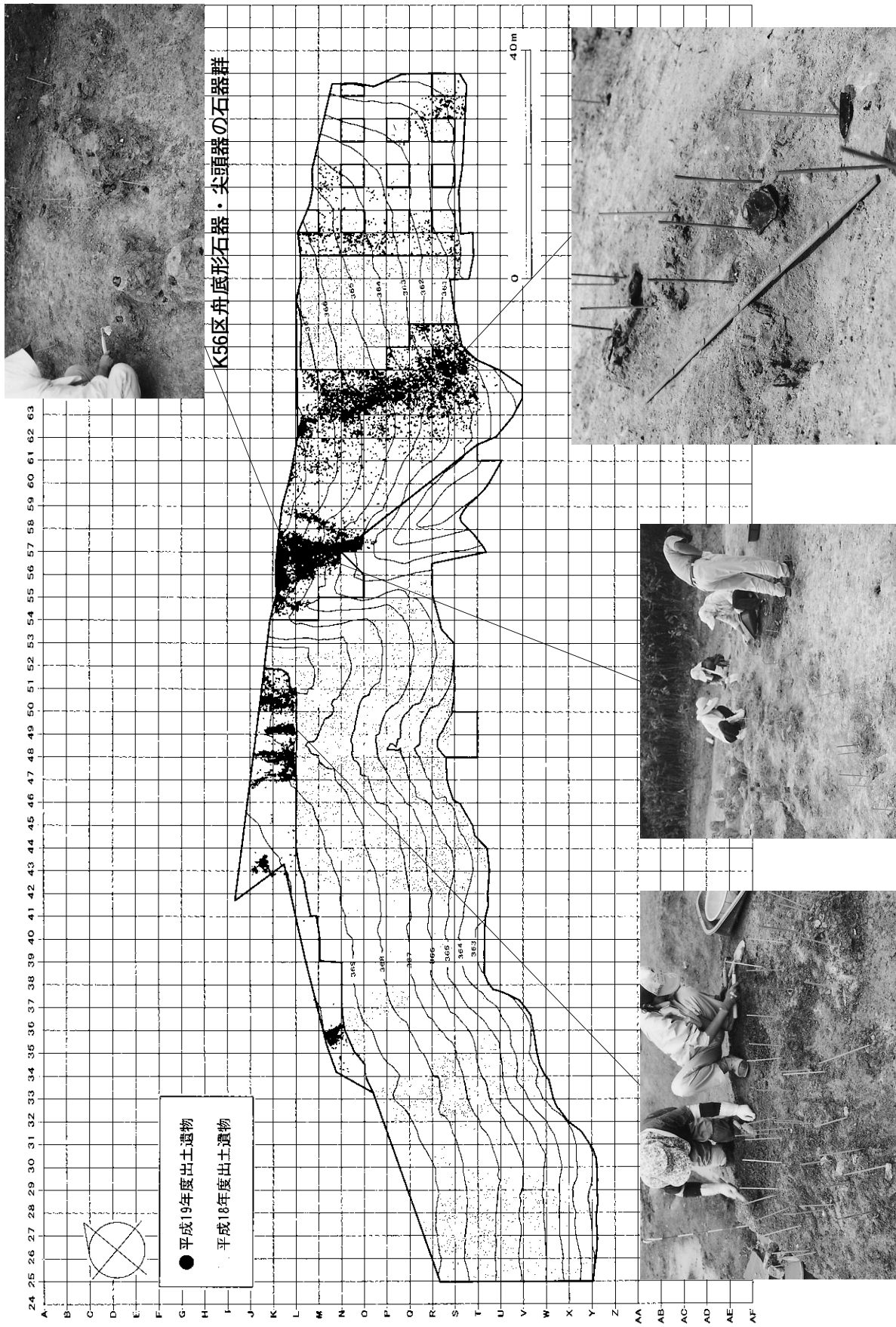
基本層序はⅠ層：表土、Ⅱ層：黄褐色土、Ⅲ層：にぶい黄褐色～灰白色土である。本来の遺物包含層はⅡ層で、Ⅲ層は無遺物層である。Ⅲ層には約3万年前降下の大雪山御鉢平降下軽石のものとみられる火山ガラスが包含されていた。

今年度の調査では20,937点を超える地点計測遺物を確認した。調査区一括で取り上げた遺物の点数については現在集計中である。全て石器で、そのほとんどが黒曜石製である。遺物分布は平成18年度に確認したブロックと連続するもののほか、55～64ライン間で新たなまとまりを確認した。

出土した特徴的な器種には、尖頭器、有舌尖頭器、両面調整石器、舟底形石器、石刃、石刃核、石核などのほか、台形様石器石器群に属する二次加工ある剥片がみられた。K～M54～58区付近に分布するブロックでは、有舌尖頭器と舟底形石器が近接して出土している。多量の剥片を伴うため、接合などの今後の整理作業により石器製作工程が復元できる可能性が高い。



調査状況



ホロカ沢 I 遺跡

ホロカ沢 I 遺跡は旧白滝 5 遺跡の湧別川下流側に隣接する河岸段丘面上、標高360m前後に立地している。幌加湧別川と湧別川の合流点からの距離は下流側に300mほどであり、旧白滝 5 遺跡と同様に石材獲得に関し恵まれた環境にある。

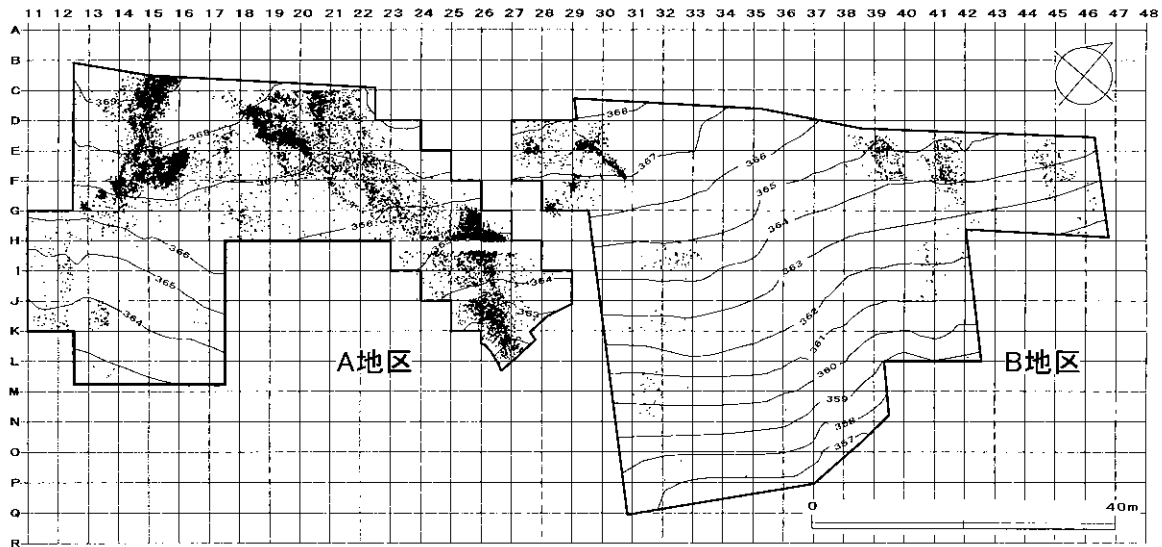
基本層序はⅠ層：表土、Ⅱ層：黄褐色土、Ⅲ層：にぶい黄褐色～灰白色土である。部分的に確認された沢地形では、粘土や砂礫が互層となった層厚0.7～1.4mの水成堆積が認められた。

今年度の調査では22,724点を超える地点計測遺物を確認した。調査区一括で取り上げた遺物の点数については現在集計中である。全て石器で、そのほとんどが黒曜石製である。

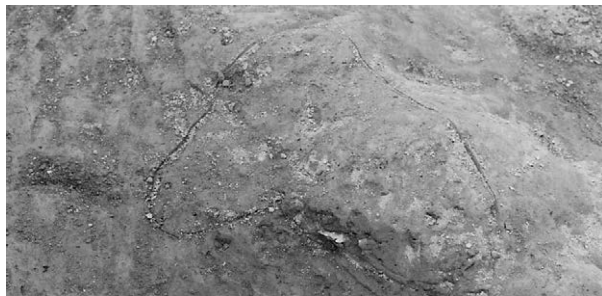
遺構は炭化物集中 1 か所 (CB-1)、剥片集中 2 か所 (FC-1・2) を確認した。CB-1 と FC-2 は同一地点に分布している。CB-1 採取の炭化木片を利用した放射性炭素年代測定を予定しており、FC-2 を中心とした石器群の年代を考察する材料としたい。

遺物分布は、A・Bの2か所に区分された調査区内、A地区に良好に認められた。A地区では沢状地形がB20区からK26区にかけて蛇行するように確認されたが、遺物のブロックはこの沢状地形に近接して分布していた。

主な出土遺物には、尖頭器、両面調整石器、舟底形石器、彫器、搔器、削器、石刃、石刃核、石核などがある。出土遺物の内容から各ブロックともほぼ同時期の石器群とみられ、尖頭器、舟底形石器、石刃石器の製作跡がブロック内で共伴している。特徴的な出土状況として、A地区13～22ライン間のブロックでは、尖頭器や舟底形石器などの製品が複数まとまって出土する地点と、剥片が密集して出土する地点がそれぞれ認められた。



ホロカ沢 I 遺跡遺物分布状況



CB-1 検出



現地見学会風景



A地区調査状況



A地区調査状況



FC-1 検出



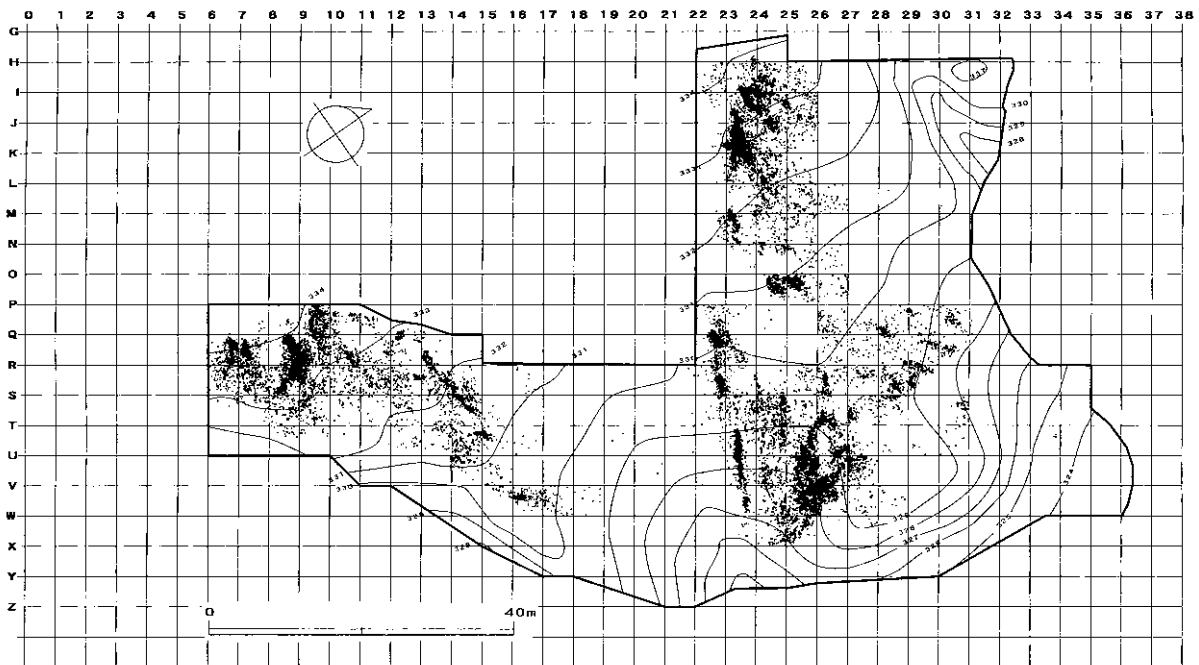
FC-2 検出

旧白滝15遺跡

湧別川左岸台地上に位置し、標高はおよそ320mである。試掘調査から、調査区内の南東段丘末端部に遺物の分布が予測された。

基本土層はおおまかにⅠ層：表土、Ⅱ層：褐色土を主体とする遺物包含層、Ⅲ層はにぶい黄褐色土を主体とする遺物が含まれない土層である。Ⅰ層については調査区中央の21ライン付近の最も深い沢地形部周辺に、腐植土層が発達していた。湿地であったためと思われ、泥炭を思わせる腐食しかけた草本の堆積も観察できた。Ⅱ層は調査区全体において土石流あるいは河川堆積に起因すると思われる土層が複数枚所々に見られた。特に4～17ラインにおいては基盤層を形成する粒子の粗い頁岩が破碎されたものが目立つ、土石流層が複数枚観察できた。この土石流層は無遺物層であるため厚く堆積する部分は重機によって除去した。また調査区の段丘縁においては崩落のため基盤層の頁岩が露出あるいはその頁岩が風化して生成された、赤色味の強い土層が表土直下から観察できた。

一次整理作業中のため遺物点数は集計中であるが、59×39×15cmのコンテナでおよそ110箱分の遺物が出土した。Ⅱ層出土遺物のうち35,549点を出土地点計測して取り上げた。Ⅰ層では21ラインより北西側の腐植土が発達した部分について遺物が多く含まれていた。特徴的の石器としては舟底形石器が目立ち、基盤層の石材利用も見受けられる。T25～27区付近からは細石刃およびその細石刃核を主とした遺物が、ある程度まとまって出土した。しかしこのあたりは作業道路によって削平され、また昭和時代に人家があったため一部が攪乱を受けている。6～13ラインでは長大な石刃が多く出土し、その石核と思われる背部に稜を作り出した石刃核も出土した。また有舌尖頭器も30cmを越える共伴している。J23区からは河川礫をその場で何個も打ち割ったと思われる状況が観察された。同範囲には地点計測遺物だけで6,000点以上が密集していた。



旧白滝15遺跡遺物分布状況



24ライン調査状況



J23区調査状況



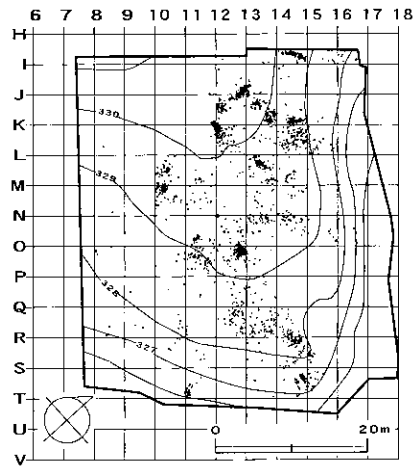
Q9区大型石刃出土状況



L23区フレイク集中検出状況

旧白滝16遺跡

湧別川左岸台地上、ラウネナイ川右岸に位置する。標高はおよそ330mである。かつて伐採中の工事



旧白滝16遺跡遺物分布状況

用道路から遺物が採取された場所である。基本土層はおおまかにⅠ層：表土、Ⅱ層：褐色土を主体とする遺物包含層、Ⅲ層：にぶい黄褐色土を主体とする遺物が含まれない土層である。Ⅲ層は上面に約3万年前に降下した大雪御鉢平降下軽石の二次堆積層と推定されるものが確認された。調査では約18,100点の遺物が出土した。そのうち、Ⅱ層出土遺物のうち3,360点については出土地点を計測して取り上げた。遺物の分布としては、12～15ラインにまとまった出土が見受けられる。調査段階ではO～R12～15区の表土について舟底形石器を主とした遺物の出土が目立った。ただし、P～R14・15区の一部は作業道によって掘削されてⅢ層が剥き出しになっていた。また、台形様石器石器群と観察されるまとまりも認められる。



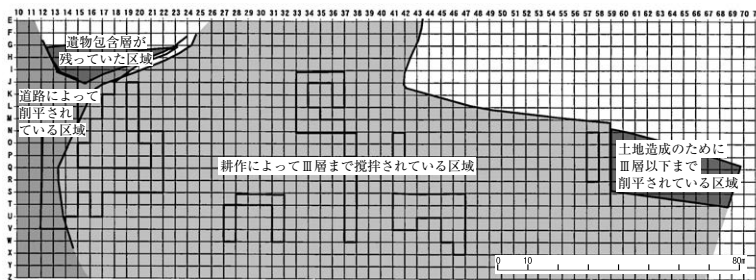
K11区調査状況



11ライン以西調査状況

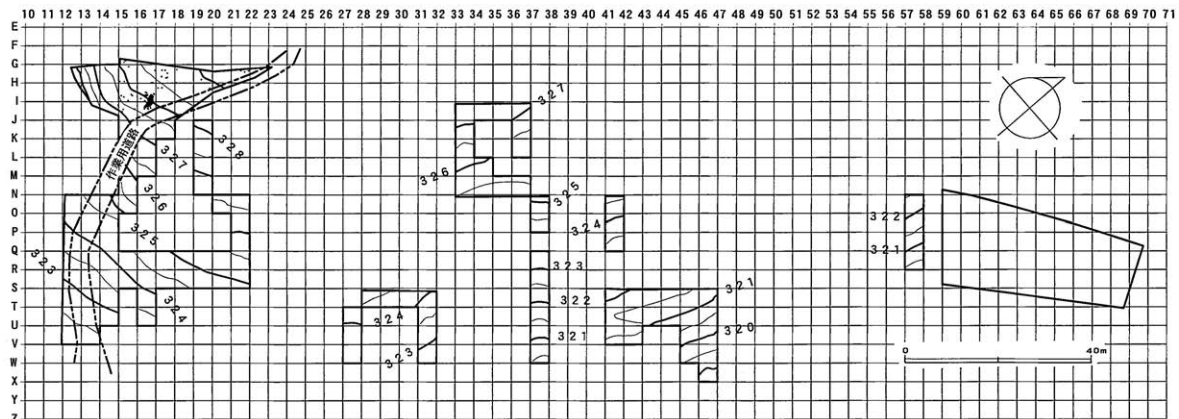
旧白滝 1 遺跡

湧別川左岸台地上、ラウネナイ川左岸に位置する。標高はおおよそ330mである。基本土層はおおまかにⅠ層：表土、Ⅱ層：褐色土を主体とする遺物包含層、Ⅲ層はにぶい黄褐色土を主体とする遺物が含まれない土層である。F～J 12～22区にⅡ層の残存が認められたが、そのほか調査区の大部分は耕作によって攪拌されていた。攪拌された耕作土中には遺物が多数含まれていた。14ライン付近から南東側は作業用道路による掘削、また60ラインより北西側は耕地造成のための掘削を受けてそれぞれⅢ層が剥き出しになっていた。今回の調査では、Ⅱ層が残存する部分の包含層調査を中心に行った。耕作された範囲については、トレンチ調査によって



旧白滝 1 遺跡包含層残存状況

トレンチ調査によって原位置を保っている遺物の存在がないと判断し、標本採取の観点から遺物採取を実施した。調査区全体では約71,300点の遺物を取り上げた。そのうち、Ⅱ層出土遺物のうち920点については出土地点を計測して取り上げた。



旧白滝 1 遺跡遺物分布状況



遺物集中出土状況

白滝遺跡群の整理

今年度は白滝8・白滝18・白滝3・旧白滝5遺跡（平成15・18年度調査分）の二次整理と今年度調査した旧白滝5・ホロカ沢I・旧白滝15・旧白滝16・旧白滝1遺跡の一次整理（旧白滝5遺跡の一部は二次整理まで）を行った。

報告書作成の順番によって作業内容は異なり、今年度報告の白滝8・白滝18・白滝3遺跡は『白滝遺跡群Ⅷ』の編集と刊行、平成20年度報告予定の旧白滝5遺跡（平成15年度調査分）は図版作成作業を行い、平成20年度以降に報告を予定している旧白滝5遺跡（平成18・19年度調査分）は接合作業、及び図化・データ処理作業を行った。

ここでは旧白滝5遺跡の小型鋸歯縁尖頭器石器群の状況を説明する。旧白滝5遺跡は、黒曜石の原石山である赤石山から流れ出る幌加湧別川と湧別川の合流点付近に位置している。本遺跡の石材環境は非常に良好で、赤石山から沢伝いに直接下った最初の平坦面にあたり、さらに眼下にある両河川からの原石の採取も可能である。上下二段の河岸段丘面（高位部・中位部）とその間の斜面部から約46万点（平成19年度分を除く）の石器が出土している。

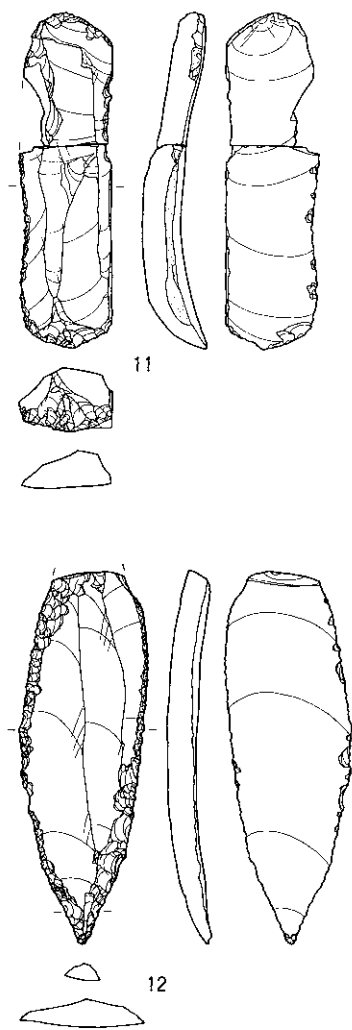
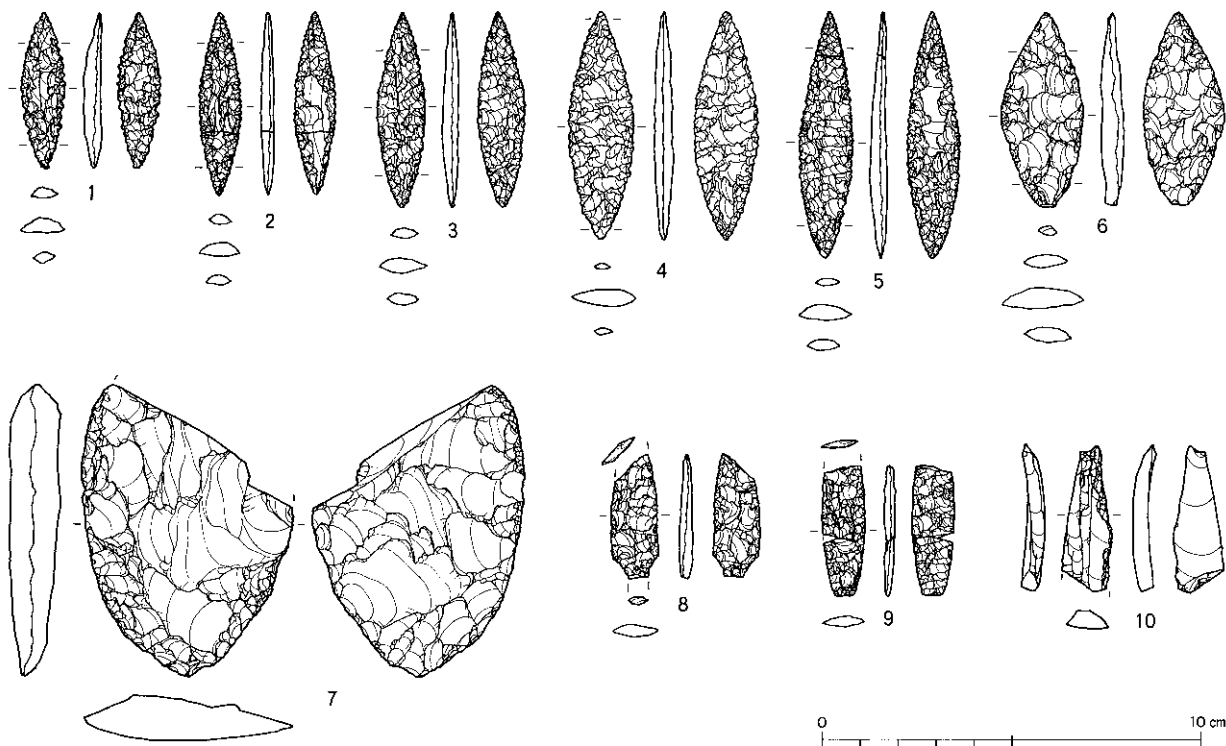
小型鋸歯縁尖頭器を含む石器群は中位部から出土し、主な器種は尖頭器、両面調整石器、彫器、搔器、削器、錐形石器、舟底形石器、二次加工ある剥片、石刃、石刃核、石核などがある。小型鋸歯縁尖頭器は柳葉形で両端が尖り、側縁が鋸歯状に加工された特徴的な尖頭器である（1～5）。断面形は凸レンズ状で、長さは4～12cm、なかでも5cm前後のものが多い。鋸歯状の縁辺は、最終的な等間隔の細かい加工により形成され、突出部から稜線が伸び、凹部から剥離のリングが始まっている。細かい加工が全面に及ぶものが大半なため、素材の形態を判定することは難しいが、一部に石刃・縦長剥片素材のものが認められる。

それ以外の尖頭器には、小型でやや幅広の形態(6)や15cm大を含む中型のものが含まれ(7)、さらに舌部を持つもの(8)や下端が平坦に加工されたもの(9)が1点ずつ出土している。彫器・搔器・削器・錐形石器は石刃を素材としているものが多い(10～12)。彫器には器体長軸と彫刀面交叉角が小さく、彫刀面傾斜角が背面側に傾くものが1点ある(10)。石器は相対的に少量である。ブロック内では尖頭器及び石刃製作が多く行われ、約60個体の母岩別資料を認定した。

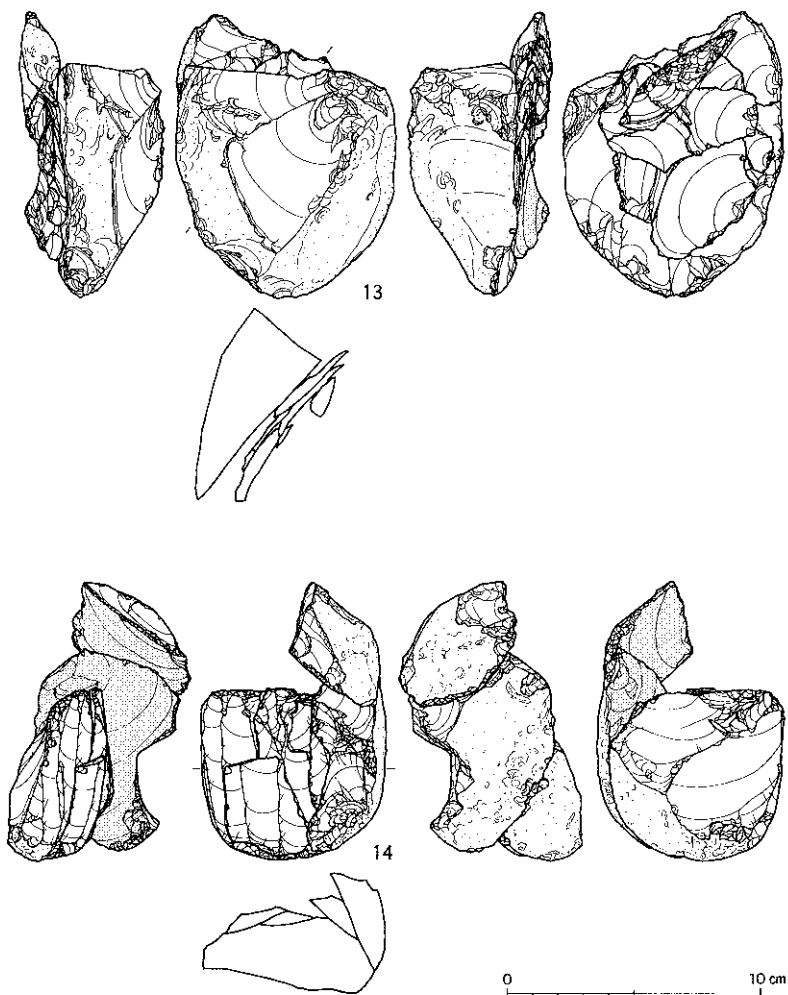
接合資料をもとに推察すると、尖頭器は一般的な石核を素材とするものの他に、原石を二分割してそれを尖頭器の素材とするものがある(13)。石刃技法は、打面調整・頭部調整を行い（一部に平坦打面あり）、打点にあたる頭部を擦った後に石刃を剥離するものが主体的である(14)。石刃核母型の形態は多様だが、①背稜を形成するものと、②平坦な裏面を設定するものに分けられる。また、正面に稜を作出するものがある。その結果、一部に両面調整石器を素材とするものが存在する。

小型鋸歯縁尖頭器は、道内での出土例が少なく、石器群として把握されているものはない。道外では山形県日向洞窟遺跡西地区など縄文時代草創期の遺跡から同様のものが出土している。また、本遺跡の石器類の一部は、道内の有舌尖頭器を含む石器群のものと類似している。特に石刃技法の調整方法、石刃核母型の製作手法は同様の特徴がみられる。しかし、本石器群の石刃核の方が、有舌尖頭器を含む石器群の石刃核より母型製作の初期段階において、粗く厚手の加工により整形されている。

これらのことから、小型鋸歯縁尖頭器を含む石器群は、道内の有舌尖頭器を含む石器群や日向洞窟遺跡西地区などの本州の縄文時代草創期の石器との関連性が高い。しかし、これら三者の詳しい関係は、明言することができない。今後は後期旧石器時代終末期とされる小型舟底形石器を含む石器群や縄文草創期の土器が出土した帯広市大正3遺跡の石器も含めて比較検討することが重要であろう。それにより東日本の旧石器時代から縄文時代への移り変わりが明らかになるものと思われる。



接合資料



旧白滝 5 遺跡 小型鋸齒縁尖頭器を含む石器群

えにわし にししまつ
恵庭市 西島松2遺跡（A-04-35）

事業名：柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道石狩支庁（札幌土木現業所）

所在地：恵庭市西島松306番、501番地先河川敷地

調査面積：8,779㎡

発掘期間：平成19年5月7日～10月30日

整理期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

調査員：佐藤和雄、谷島由貴、土肥研晶、吉田裕吏洋

遺跡の概要

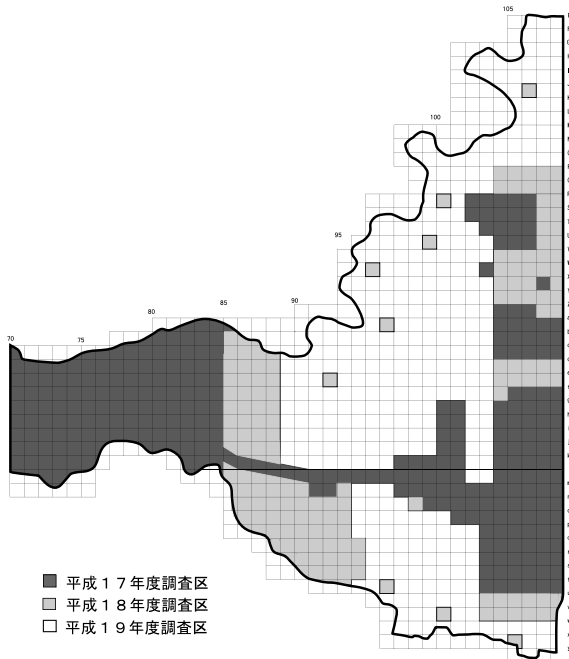
遺跡は、JR恵み野駅から北西約700m、柏木川とその支流であるキトウシュメンナイ川に挟まれた国道36号に面する標高約28mの沖積低地上に立地する。今年度は発掘調査の3年目にあたり、現地調査の最終年度である。

恵庭市内の西方を流れる柏木川流域は、市内でも遺跡密度の濃い地域で、両岸には数多くの遺跡が登録されている。なかでも本地域は、柏木川左岸と支流右岸に分布する遺跡に挟まれ、周りを遺跡に囲まれている。遺跡の下流側には、平成17年度で現地調査を終了した西島松3・5遺跡が、国道を挟んだ上流側には柏木川11・13遺跡が、柏木川対岸には、西島松9・10遺跡、キトウシュメンナイ川対岸には西島松1・4遺跡が分布する。今年度の調査区の大半は畑の耕作で深く削平を受けていたが、台地の縁付近や標高の比較的低い地域には包含層も残っており、遺構の分布も台地縁に偏る傾向が見られた。

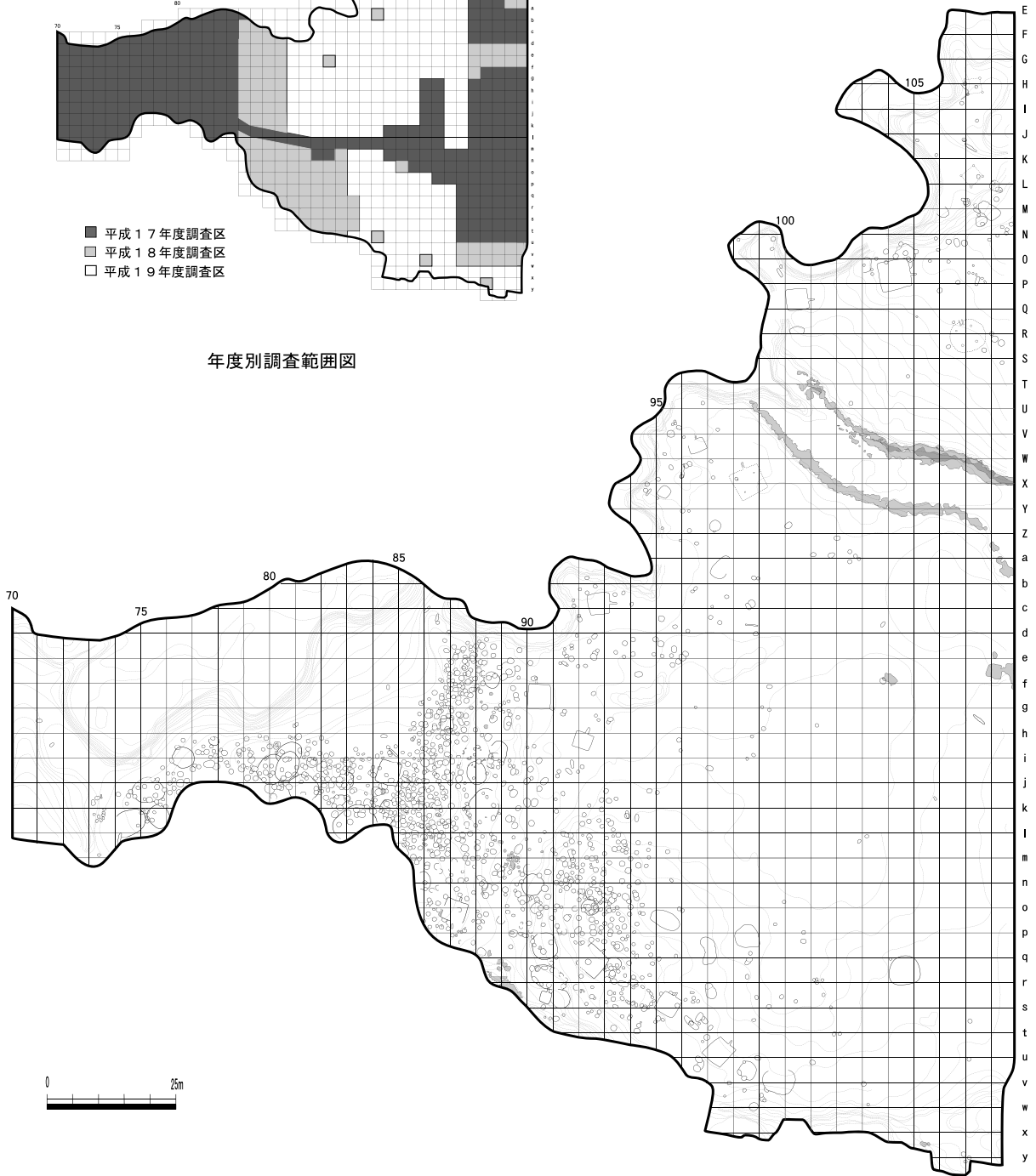
基本土層は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土で、斜面や擦文文化期の住居の堆積中には樽前a降下軽石層や白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm）が、縄文時代晩期の土坑覆土には、樽前c1降下軽石層の堆積がみられるものもあった。

遺構と遺物

今年度検出された遺構は、住居跡27軒（擦文文化期11軒、続縄文時代1軒、縄文時代15軒）土坑（土坑墓を含む）325基、Tピット2基、焼土211か所、小ピット158か所である。擦文文化期の住居で最大の規模のものは、約5.6×5.6mの規模で、最小の規模は約2×2mの大きさであった。いずれもカマドをもっていたとみられ、煙道はおよそ東向きから南向きの間である。時期は9世紀前半のものともみられ、台地縁に沿って分布する（H40・H54他）。低い場所に位置する住居は柏木川の氾濫により半分が失われているものもある。床面に柱穴をもつものは2軒で、あとのものは柱穴を竪穴の外側にもつカリンバ型の住居とみられる。続縄文時代の遺構（H35）は、昨年調査区との境を精査した際、縄文時代晩期後葉の土坑を切る長径約3mの竪穴として確認した。形状のほかは住居跡と認定する根拠は乏しいが、覆土中には晩期の土器に混じり後北A式相当の破片が少量出土している。縄文時代の住居跡では、前期後半の植苗式土器を伴うものが2軒、後期の竪穴と確認されたものが5軒、このうち出入口の痕跡があるものが2軒あった。昨年度調査範囲から続く晩期後葉の円形土坑群が検出された。土坑は台地縁にまばらに広がり、密な分布はみられなかった。また、晩期後葉の墓（口絵1）が10基ほど集まった墓域も見つかっている。墓の平面形は小判形で、長軸端に2本の墓標を立てられていたようである。半島状に突出した地形の付け根付近からはアイヌ文化期とみられる墓が2基（P1349・P1359）検出された。副葬品に漆器は無く、太刀・刀子・魚鉤（マレック）などの金属製品のみであった。遺物は約13万点出土した。晩期後葉の土器が大半を占めるが、そのほか後期中葉・後葉や前期後葉のものも比較的多い。



年度別調査範囲図



遺構位置図



H35セクション



H40炭化材検出状況



H54煙道セクション



P1349遺物出土状況



P1359遺物出土状況

むかわ町 穂別^{ちやう ほべつ}D遺跡 (J-14-49)

事業名：北進平取線交付金B（交安）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道胆振支庁（室蘭土木現業所）

所在地：勇払郡むかわ町穂別114-38ほか

調査面積：4,154㎡

調査期間：平成19年5月17日～平成19年9月7日

調査員：工藤研治、越田雅司、鈴木宏行、福井淳一

遺跡の概要

穂別D遺跡は鷓川の支流である穂別川の右岸段丘上、むかわ町穂別の市街地に位置している。

遺跡は2面の段丘面に分けられ、標高は高位面が78～80m、低位面が74～75mである。高位面は隣接する中学校のグラウンドから広がる平坦面の西側縁部に位置し、西側は斜面になっている。低位面は高位面から連続する斜面際に位置している。

調査区内には上下水道や電柱等が敷設されており攪乱を受けている箇所が多く、また、中央は道路により上部が削平されている。

土層は上層からⅠ層：表土・盛土層、Ⅱ層：樽前b火山灰（Ta-b）層、Ⅲ層：黒色土層、Ⅳ層：樽前c火山灰（Ta-c）層、Ⅴ層：黒色土層、Ⅵ層：樽前d火山灰（Ta-d）漸移層、Ⅶ層：樽前d火山灰（Ta-d）層、Ⅷ層：暗褐色粘質土層、Ⅸ層：灰白色粘質土層である。住居跡の覆土や斜面部には樽前a火山灰（Ta-a）が一部堆積し、斜面部には白頭山-苫小牧火山灰（B-Tm）が認められる。遺物包含層はⅢ・Ⅴ・Ⅵ層である。

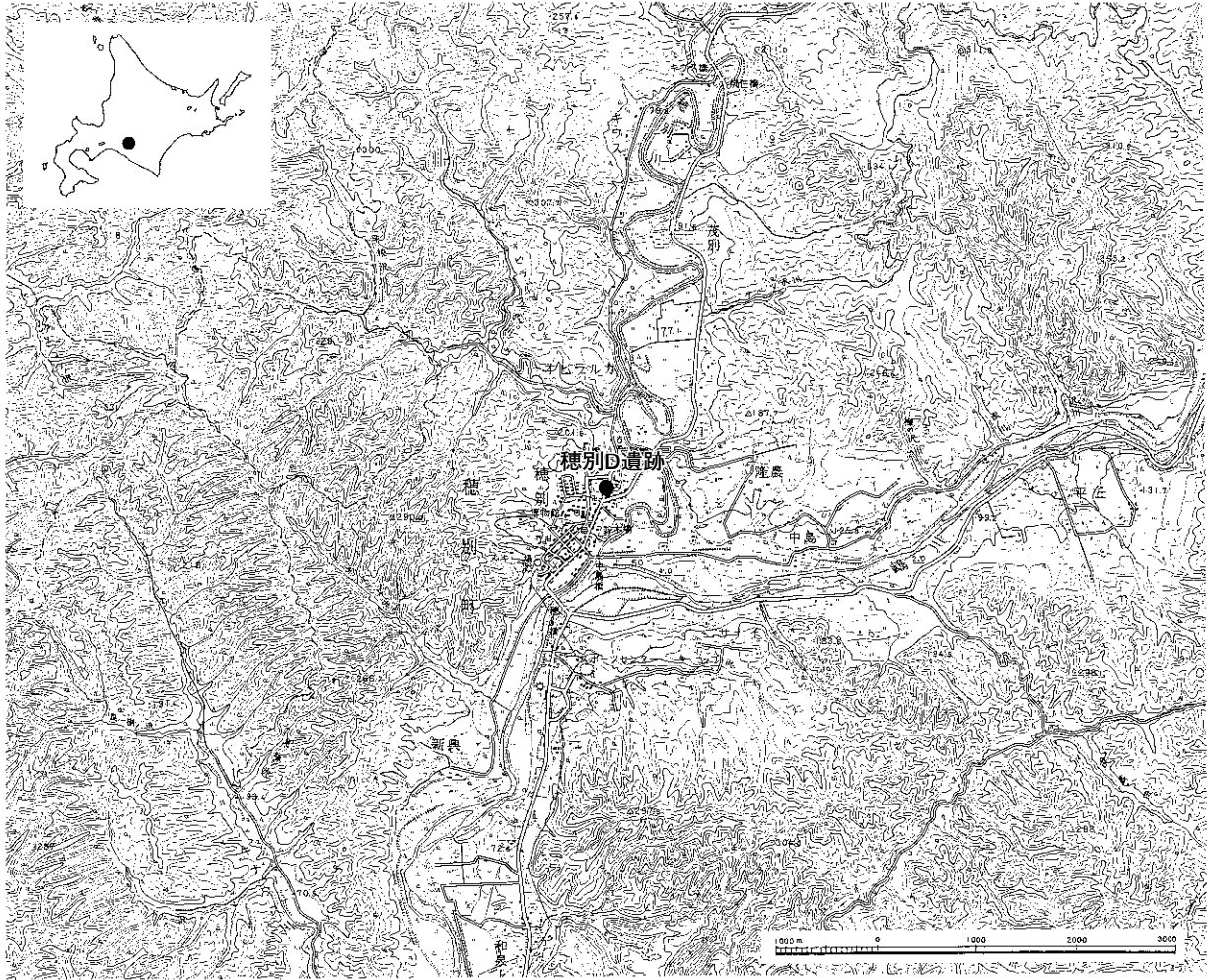
遺構と遺物

高位面ではⅢ層からアイヌ文化期・擦文文化期、Ⅴ層から縄文時代中・後期、低位面ではⅤ層から縄文時代中・後期、Ⅴ層下部からⅥ層にかけて縄文時代早期の遺構・遺物が出土し、遺物は全体で約18,000点出土している。

高位面ではアイヌ文化期の柱穴が11基、焼土が6か所検出され、柱穴の周辺で鉄鎌、鉄製針、銅製品（形状不明）、土玉、鹿の下顎骨、カワシンジユガイの殻皮、小礫が出土し、擦文文化期の竪穴住居跡1軒と擦文土器が出土している。竪穴住居跡は東側にカマドを持つ。平面形は四角形であるが各辺は直線的ではなく弧状である。中央に炉があり、厚さ10cm程度の貼り床が認められる。床面からは甕・杯や刀子が出土し、住居跡の年代はそれらの土器から11世紀と推定される。

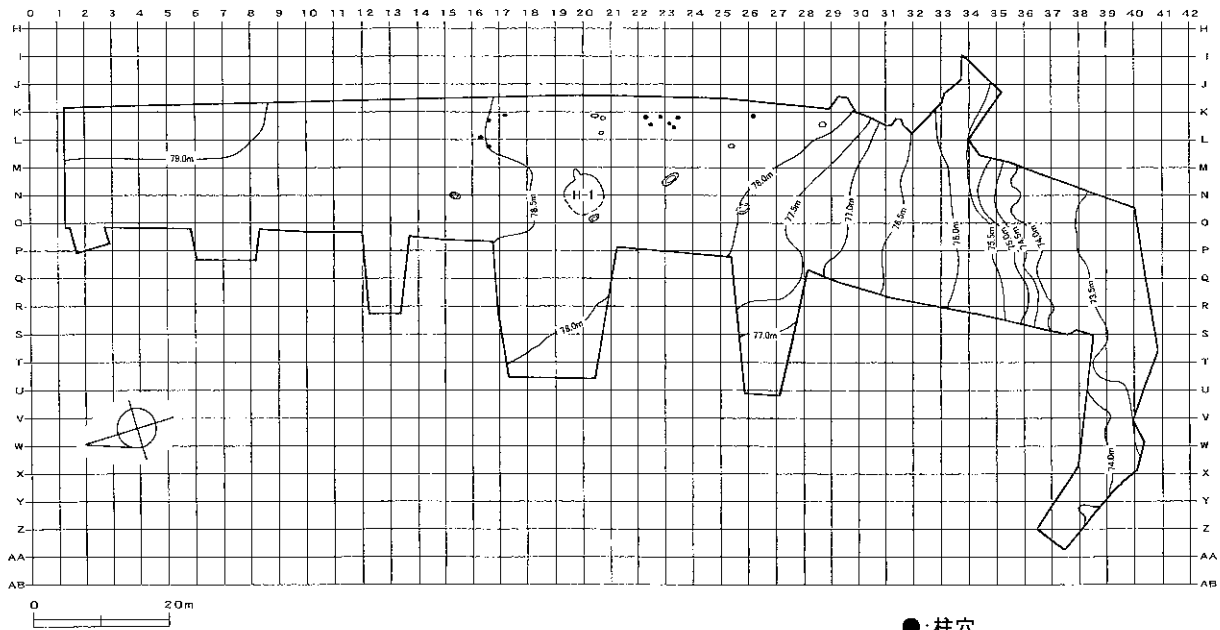
Ⅴ層からは縄文時代中・後期の土器・石器が出土し、石囲炉2基、土器囲炉2基が検出されている。土器は余市式が主体的で、その他に円筒土器上層式・柏木川式・北筒式が出土している。石器は緑色泥岩・片岩製の石斧製作に関連するものが多く、石斧製作が主体的に行われており、周辺で石材が採取されたと考えられる。

低位面ではⅤ・Ⅵ層から縄文時代早期の土器・石器が出土し、土器は東釧路Ⅲ式・コッタロ式・中茶路式、石器は石鏃・つまみ付きナイフや台石などが出土している。



遺跡位置図

国土地理院発行の5万分の1地形図「穂別」を使用



遺構位置図

- : 柱穴
- : 焼土
- ◎: 石囲炉・土器囲炉



調査状況



Ⅲ層遺物出土状況



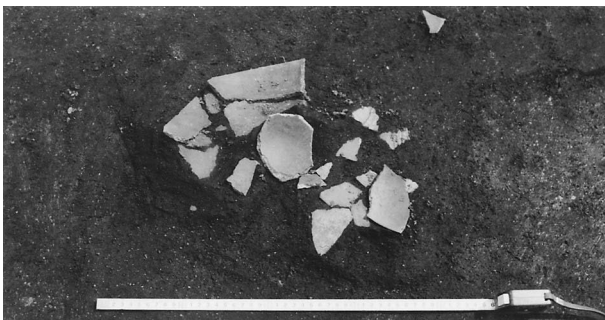
H-1 遺物出土状況



H-1 カマド検出状況



石囲炉検出状況



H-1 土器出土状況



V層遺物出土状況

つるいむら しもほろろ
鶴居村 下幌呂1遺跡 (M-08-16)

事業名：釧路弟子屈線交安1種(統合)工事(中央帯)に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道釧路支庁(釧路土木現業所)

所在地：鶴居村字幌呂原野基線29-2

調査面積：610㎡

調査期間：平成19年9月6日～平成19年10月31日

調査員：工藤研治、越田雅司、鈴木宏行、影浦 覚、福井淳一

遺跡の概要

下幌呂1遺跡は鶴居村市街地の10km南、下幌呂市街地の2km北側、釧路湿原北西縁辺部に位置し、雌阿寒岳外輪山から南東に向かって釧路湿原に注ぎ込む幌呂川右岸の河岸段丘上に立地する。釧路湿原周縁の台地や河川の流域には多くの遺跡が分布し、遺跡の南方10kmには北斗遺跡が位置する。

遺跡は幌呂川に沿って長さ約1.5km、幅250～300mの広い範囲に広がることが確認されており、一帯に広がりを見せる規模の大きい遺跡である。調査区はその北西部の幌呂川右岸に位置し、地形面はほぼ平坦で、標高は14～15mである。

調査区内には電柱の痕跡などが残る程度で、耕作等による大規模な削平・攪乱を受けておらず、保存状態は良好であった。

土層は上層からⅠ層：表土(黒色土)層、Ⅱ層：暗褐色土層、Ⅲ層：樽前c火山灰(Ta-c)層、Ⅳ層：黒色土層、Ⅴ層：暗褐色土(漸移層)層、Ⅵ層：明黄褐色ローム質土層、Ⅶ層：オリーブ褐色砂礫層である。住居跡の覆土にはTa-c上層の黒色土層中に駒ヶ岳c2火山灰(Ko-c2)が部分的に認められる。遺物包含層はⅣ層およびⅤ層である。

遺構と遺物

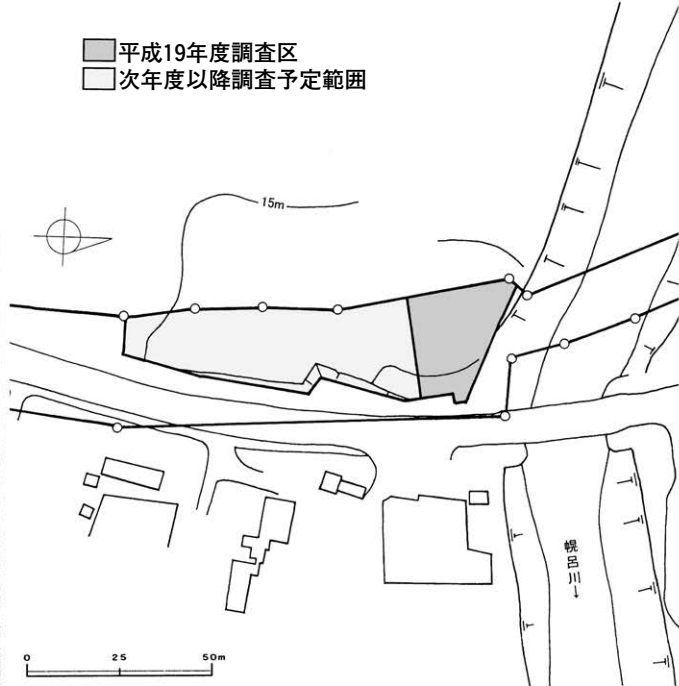
遺構は、竪穴住居跡11軒、土坑26基、焼土14か所、盛土1か所が検出され、調査面積610㎡に対して分布密度が高い。竪穴住居跡は時期の判明しているものでは早期中茶路式・後期北筒Ⅲ式・後期鮭澗式期(ほっけま)のものがある。そのほか、北筒式とみられる住居跡には床面にベンガラが分布するものがある。鮭澗式の住居跡は2軒検出され、2軒とも壁面近くに小型の土器が出土した。1軒は出入り口と思われる構造を持ち、3個体の小型土器が出土し、もう1軒は長さ50cm程の扁平な台石に並んで1個体の小型注口土器が倒立した状態で出土した。土坑は中茶路式期のものが多く、そのうち1基は墓とみられ、壙底に鉢の底部が逆さに置かれ、近くからつまみ付きナイフなどが出土している。盛土は中期後葉から後期前葉に形成されたものとみられ、調査区外に広がるため正確な規模は不明であるが幅は10m程度と推定される。盛土中には多くの焼土が含まれている。

遺物は土器、石器類が出土した。土器は早期後半の浦幌式、中茶路式、中期後葉から後期前葉にかけての北筒Ⅱ・Ⅲ式、後期中葉の鮭澗式、晩期のものが出土している。浦幌式土器には表裏に条痕文のものや無文の土器が伴い、多くの石刃製彫器や彫器削片、石刃鎌、石刃、石刃核、矢柄研磨器などの石刃鎌石器群が伴出している。そのほか、石器類は石鎌・石槍・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石核・石斧などが出土している。石鎌は明瞭な茎部が作出されない直線的なもの、やや大型の有茎のもの、明瞭な茎部が作出されるものがあり、それぞれ中茶路式・北筒式・鮭澗式期に対応するとみられる。

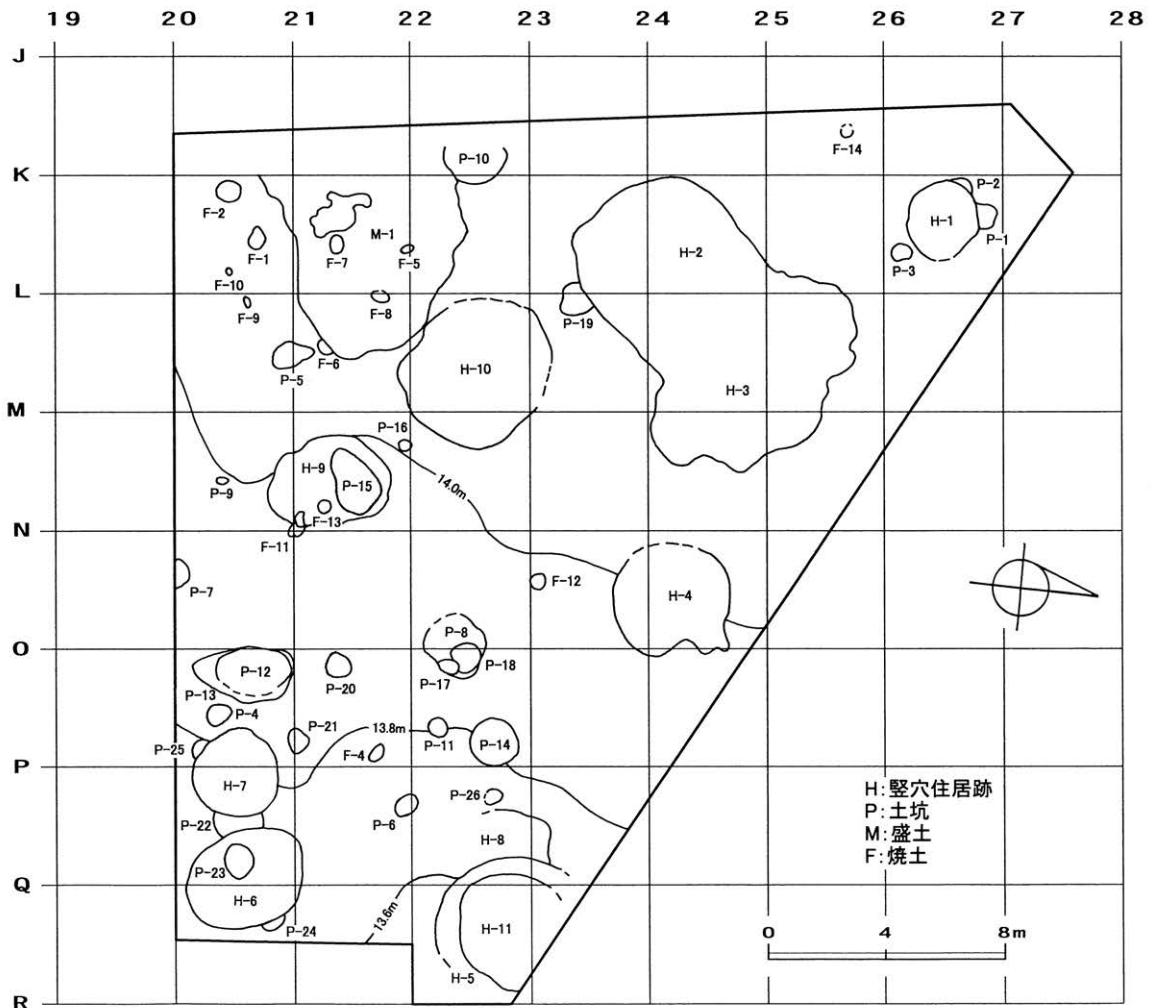
調査範囲の南側には今年度調査区から連続する竪穴住居跡や直径30m程度の別の盛土が確認されており、次年度にはそれらの調査を行う予定である。



遺跡位置図



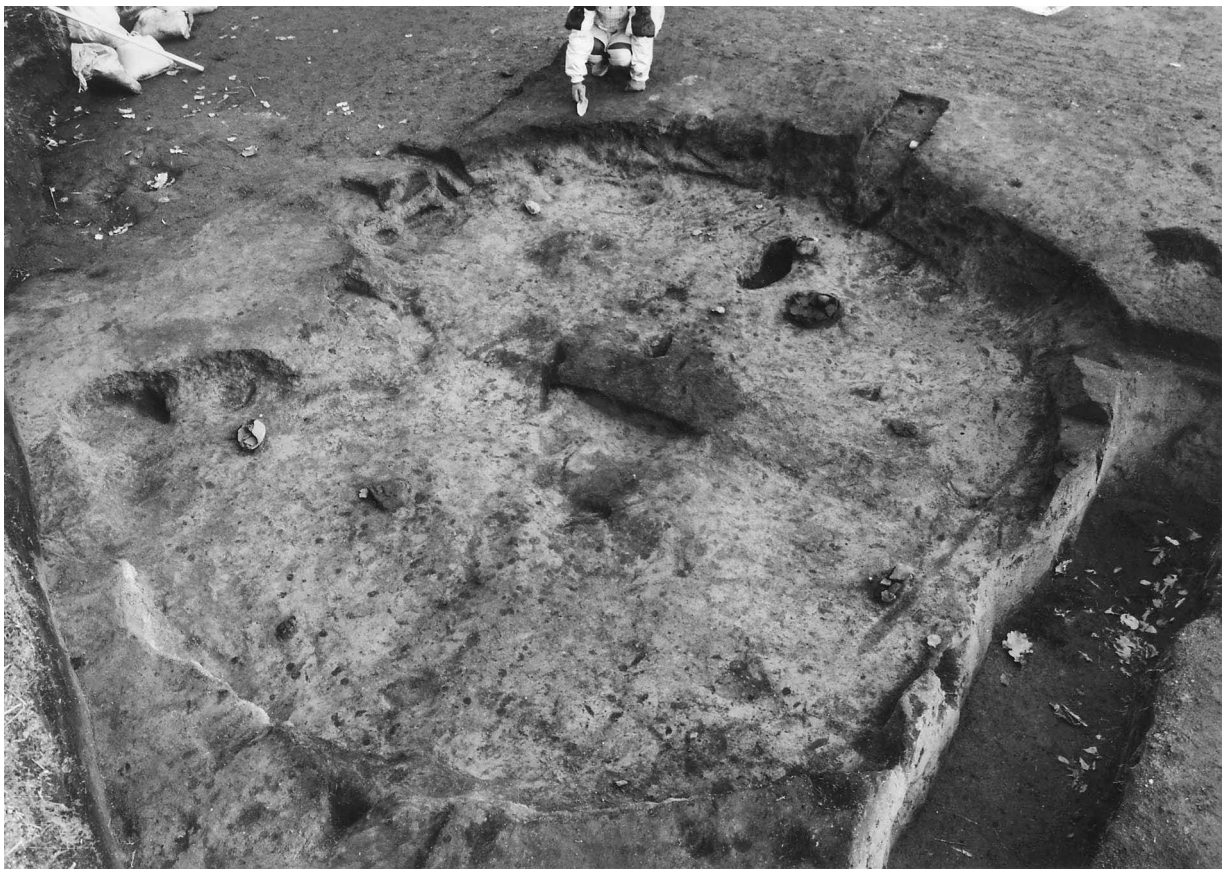
調査範囲図



遺構位置図



調査状況



H-4 遺物出土状況



H-4 小型土器出土状況



H-5 注口土器出土状況



盛土 (M-1) 検出状況



墓坑 (P-5) 検出状況



浦幌式期遺物出土状況

3 現地研修会の記録

9月6日(木)、7日(金)に厚真町、千歳市、恵庭市を会場にして現地研修会を行った。今回は研修テーマを「アイヌ文化期の遺構と遺物」とし、当埋蔵文化財センターが調査中の遺跡のみならず、厚真町教育委員会が調査中の遺跡、町内の出土遺物、桜丘チャシなども見学した。あわせてニタツプナイ遺跡(厚真町)、上幌内モイ遺跡(厚真町)、穂別D遺跡(むかわ町)、梅川4遺跡B・C地区(千歳市)については、事例報告もおこなった。台風9号接近による風雨があったが、研修会は計画した内容に近い範囲で実施できた。

出土遺物の見学、研修会場、事例発表者などの準備にあたっては厚真町教育委員会の幅田敏夫教育長から大きな配慮をいただいた。さらに事例報告、遺跡の案内・説明では乾哲也、小野哲也、奈良智法、天方博章、熊谷誠の諸氏には、好意に満ちた対応をしていただいた。ここに記して感謝の念をあらわしておきます。

以下に研修会の概要を記しておく。

- 6日(木) 厚真町 調査整理事務所で出土遺物の見学、青少年センター展示室の見学
ニタツプナイ遺跡の見学、オニキシベ2遺跡の見学
総合ケアセンター「ゆくり」生涯学習室で事例報告
ニタツプナイ遺跡(報告者:乾哲也)、上幌内モイ遺跡(報告者:小野哲也)
穂別D遺跡(報告者:福井淳一)、梅川4遺跡B・C地区(報告者:芝田直人)
- 7日(金) 厚真町 桜丘チャシの見学
千歳市 梅川4遺跡、祝梅川小野遺跡、オルイカ2遺跡、キウス5遺跡の見学
恵庭市 西島松2遺跡の見学



4 協力活動及び研修

(1) 協力活動

ア 発掘現場見学

* 遠軽町白滝遺跡群見学（遠軽町生田原しらかば大学）	5月24日
* 遠軽町白滝遺跡群見学（東神楽町あやめ学園）	6月18日
* 千歳市キウス5遺跡見学・体験発掘（千歳市立千歳第二小学校6年生）	7月3日
* むかわ町穂別D遺跡見学（むかわ町立穂別中学校）	7月10日
* むかわ町穂別D遺跡見学（むかわ町立穂別博物館）	7月13日
* 白老町虎杖浜2遺跡見学・体験発掘（白老町教育委員会）	7月14日
* 北斗市館野2遺跡見学（七飯町歴史館）	7月24日
* 北斗市館野2遺跡見学（七飯町歴史館ジュニア探検クラブ）	7月28日
* 北斗市館野2遺跡見学（北海道開発局函館開発建設部函館道路事務所）	8月10日
* 千歳市キウス5遺跡見学・発掘体験（北海道開発局札幌開発建設部千歳道路事務所）	8月10日
* 千歳市キウス5遺跡見学・発掘体験（千歳市教育委員会埋蔵文化財センター）	8月10日
* 遠軽町白滝遺跡群見学（サイエンス倶楽部）	8月22日・23日
* 遠軽町白滝遺跡群見学（オホーツク国際交流センター）	8月28日
* 恵庭市西島松2遺跡・千歳市キウス5遺跡見学（恵庭市郷土資料館）	9月1日
* 遠軽町白滝遺跡群見学（白滝黒曜石遺跡ジオパーク推進協議会）	9月3日
* 遠軽町白滝遺跡群見学（遠軽町立白滝小学校6年生）	9月4日
* 恵庭市西島松2遺跡見学（恵庭市恵み野旭小学校3年生）	9月4日
* 遠軽町白滝遺跡群見学・体験発掘（遠軽町ワクワク自然教室）	9月8日
* 北斗市館野2遺跡見学（北斗市教育委員会）	9月8日
* 恵庭市西島松2遺跡・千歳市キウス5遺跡・祝梅川小野遺跡・梅川4遺跡見学 （噴火湾考古学研究会遺跡見学会）	9月21日
* 北斗市館野2遺跡見学（南北海道考古学情報交換会遺跡見学会）	10月6日

イ 委員会・講演会

* 出土資料の考古学調査指導（千歳市） 《依頼》田口・花岡	平成18年12月19日～平成19年1月31日
* 平成18年度アイヌ工芸展札幌会場閉幕に係る借用資料の検品及び梱包立会業務（札幌市） 《派遣》田口	1月29日
* 恵庭市郷土資料館平成18年度遺跡調査報告会（恵庭市） 《発表者》谷島・土肥	2月10日
* 出土木材データベースワーキンググループ会議（東京都八王子市） 《派遣》三浦	2月11日・12日
* 千歳市教育委員会調査報告書Ⅲ『トメト川3遺跡（第2次調査）』作成に係わる遺物写真撮影指導（千歳市） 《派遣》菊池	2月20日・21日

- * 『えぞ地の畑作農業を探る』シンポジウム（函館市）
《発表者》菊池・中山・坂本 2月24日
- * 史跡標津遺跡群、天然記念物標津湿原整備委員会（標津町）
《アドバイザー》千葉 3月1日・2日
- * 漆器塗膜・金属製品等脆弱資料整理保管に関する指導（厚真町）
《派遣》田口 3月15日・16日
- * 科学研究費補助金「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」
《研究協力者》西田 4月1日～平成20年3月31日
- * 北広島市文化財保護審議委員（北広島市）
《委嘱》藤井 4月1日～平成21年3月31日
- * 史跡標津遺跡群、天然記念物標津湿原整備委員会（標津町）
《アドバイザー委嘱》畑 4月20日～平成20年3月31日
- * 出土遺物の材料把握等に関する指導（厚真町）
《委嘱》田口 4月23日～平成20年3月31日
- * 漆器・金属製品等の取り上げおよび保存処理に関する指導（厚真町）
《派遣》田口 5月24日
- * 北海道大学アイヌ納骨堂におけるイチャルパ（札幌市）
《参加者》西田 8月3日
- * 北海道の縄文時代の始まりを昼下がり語る会（帯広市）
《発表者》熊谷・直江 8月4日
- * 平成19年度北の縄文文化学交流会議委員（岩手県盛岡市）
《委嘱》畑 8月7日～平成20年3月31日
- * 豊浦町小幌洞窟遺跡発掘トレンチ土層断面剥離標本作成及び指導（豊浦町）
《派遣》田口 8月28日・29日
- * 厚真町内発見の丸木舟の保存処理等指導（厚真町）
《派遣》田口 9月5日
- * 平成19年度北の縄文文化学交流会議（岩手県盛岡市）
《派遣》畑 9月16日・17日
- * 北海道文化財保護協会文化財講演会（札幌市）
《講師》畑 9月21日
- * 札幌医科大学収蔵アイヌ人骨・遺跡出土人骨イチャルパ（札幌市）
《参加者》西田 10月3日
- * 史跡標津遺跡群、天然記念物標津湿原整備委員会（標津町）
《アドバイザー》畑 10月9日・10日
- * 史跡カリンバ遺跡整備に伴う講演（恵庭市）
《講師》畑 10月26日
- * 南北海道考古学情報交換会（函館市）
《発表者》佐川・佐藤（剛）・立田 12月2日
- * 北海道考古学会遺跡調査報告会（札幌市）
《発表者》皆川・土肥・山田 12月15日

(2) 研修

ア 研修・研究会参加

- *平成18年度第2回埋蔵文化財担当職員等講習会（熊本県山鹿市）
熊谷・小杉・中村 1月11日～13日
- *平成19年度第73回日本考古学協会（東京都）
田口 5月25日～28日
- *平成19年度第24回日本文化財科学会（奈良県奈良市）
田口 6月1日～4日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会（埼玉県さいたま市）
佐藤（俊）・葛西 6月7日・8日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ等研究委員会（東京都多摩市）
倉橋 7月26日・27日
- *平成19年度日本第四紀学会（兵庫県神戸市）
花岡 8月31日～9月2日
- *平成19年度第1回埋蔵文化財担当職員等講習会（福島県白河市）
小杉 9月6日～8日
- *平成19年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会北海道・東北地区会議ならびに同北海道・東北地区コンピュータ等研究委員会（札幌市）
畑・松本（昭）・越田（賢）・西田 10月11日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（新潟県佐渡市）
中村・今本 10月18日・19日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ等研究委員会公式ホームページ「倭国ネット」作業部会（愛知県弥富市）
倉橋 10月18日
- *平成19年度北海道教育関係公益法人研修会（札幌市）
畑・松本（昭） 11月15日
- *独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
平成19年度埋蔵文化財担当者専門研修「遺跡地図情報課程」（奈良県奈良市）
芝田 11月27日～30日
- *全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修（中国）
袖岡・福井 12月5日～10日

イ 内部研修

- *平成19年度現地研修会（厚真町・千歳市・恵庭市） 9月6日・7日
- *平成19年度現地調査報告会（センター研修室） 11月29日

5 平成19年度刊行予定報告書

第246集『森町 濁川左岸遺跡(2)』

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第247集『森町 石倉1遺跡』

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第248集『恵庭市 西島松3遺跡・西島松5遺跡(5)』

柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第249集『恵庭市 柏木川4遺跡(3)』

柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第250集『白滝遺跡群Ⅷ』

一般国道450号白滝丸瀬布工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第251集『千歳市 キウス5遺跡(8)』

一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事埋蔵文化財発掘調査報告書

第252集『千歳市 キウス9遺跡』

一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事埋蔵文化財発掘調査報告書

第253集『千歳市 梅川4遺跡(1)』

一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事埋蔵文化財発掘調査報告書

第254集『釧路町 天寧1遺跡』

一般国道44号釧路外環状道路改良工事に伴う発掘調査報告書

第255集『江別市 対雁2遺跡(10)』

石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第256集『白老町 虎杖浜2遺跡(4)』

一般国道36号白老町虎杖浜改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第257集『北斗市 矢不來6遺跡(2)・矢不來9遺跡・矢不來11遺跡(2)』

高規格幹線道路函館江差自動車道函館茂辺地道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

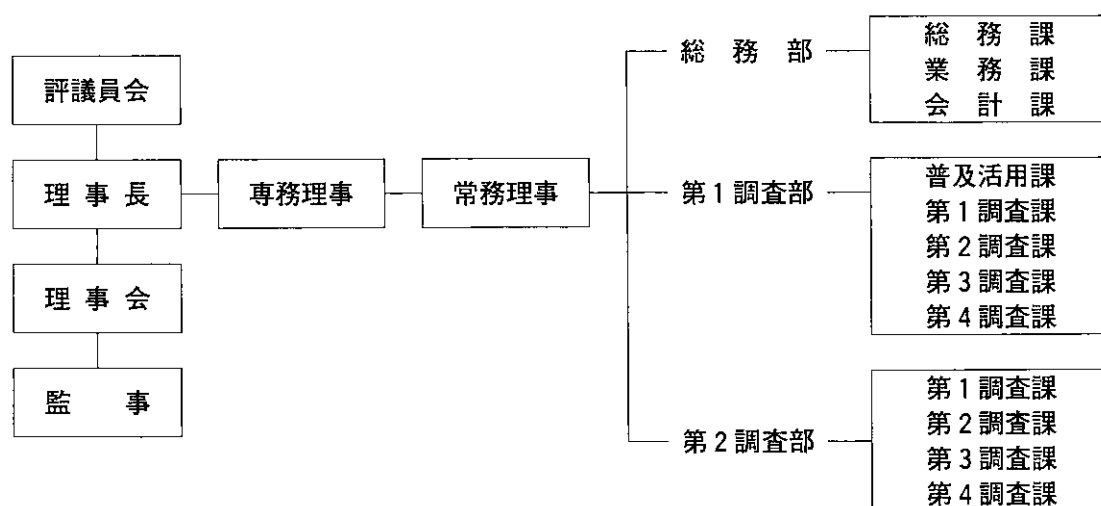
6 組織・機構

役員（平成19年6月1日現在）

理事長	森重楯一
専務理事	佐藤俊和
常務理事	畑宏明
理事	石林清
理事	小原信夫
理事	菊池俊彦
理事	北川芳男
理事	谷本一之
理事	田端宏
理事	藤島省三
理事	宮崎勝
理事	三野紀雄
監事	佐藤一夫
監事	村山邦彦

評議員（平成19年6月1日現在）

評議員	加藤邦雄
評議員	川上淳
評議員	木村方一
評議員	白崎三千年
評議員	白野覚
評議員	昌子守彦
評議員	鶴丸俊明
評議員	戸塚隆
評議員	本庄裕子
評議員	松田光皖
評議員	山田健
評議員	横山健彦



7 職 員 (平成19年4月1日現在)

総務部

総務部長 松本昭一
 総務課長 松本 繁
 主任 葛西宏昭
 主任 中村貴志
 参与 北浦 満
 参与 加藤 英樹

業務課長 菅野 聡
 主任 篠田千秋
 主任 小杉 充
 参与 小笠原 学
 参与 中村輝夫
 参与 山本昌利
 会計課長 吉田貴和子
 主任 今本宏信

第1調査部

第1調査部長 越田賢一郎
 普及活用課長 村田 大
 主任 藤本昌子
 主任 倉橋直孝
 主任 藤井 浩
 第1調査課長 田口 尚
 主任 花岡正光
 主任 立川トマス
 第2調査課長 遠藤香澄
 主任 菊池慈人
 主任 芝田直人
 主任 酒井秀治
 主任 柳瀬由佳
 嘱託 山田和史
 第3調査課長 三浦正人
 主任 鎌田 望
 主任 愛場和人
 主任 末光正卓
 主任 広田良成
 第4調査課長 鈴木 信
 主任 笠原 興
 主任 ○宗像公司
 主任 阿部明義
 主任 山中 文雄

第2調査部

第2調査部長 西田 茂
 第1調査課長 佐藤和雄
 主任 谷島由貴
 主任 土肥研晶
 主任 吉田裕吏洋
 第2調査課長 佐川俊一
 主任 皆川洋一
 主任 新家水奈
 主任 佐藤 剛
 主任 富永勝也
 主任 立田 理
 第3調査課長 熊谷仁志
 主任 中山昭大子
 主任 袖岡淳史
 主任 坂本尚史
 主任 大泰司 統
 主任 直江康雄
 第4調査課長 ○工藤研治
 主任 越田雅司
 主任 鈴木宏行
 主任 影浦 覚
 主任 福井 淳一

○：北海道教育庁の派遣職員

調 査 年 報 20

平成19年度

平成20年 2月 8日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685-1
TEL 011-386-3231・FAX 011-386-3238
URL <http://www.domaibun.or.jp/>
E-mail mail@domaibun.or.jp

印 刷 社会福祉法人 北海道リハビリー
〒061-1195 北広島市西の里507番地1
TEL 011-375-2116(代)・FAX 011-375-2115
